

川柳塔

昭和十五年五月二十五日印刷
昭和十五年六月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷六四九号



日川協加盟

No. 649

六月号

夢が広がるシヨッピング
近鉄がお届けします

アベノ近鉄 ● TEL 621-1231

上本町近鉄 ● TEL 779-1231

奈良近鉄 ● TEL 33-1111

アベノ
上本町
奈良

 **近鉄**

ヤングのための
カジュアルウェア

クラブウ Kurabo fabrics
カジュアルウェア

倉敷紡績株式会社



南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉—忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル **ホテルパシフィック**
政府登録国際観光旅館 **朝日**

勝浦温泉—海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 **中の島**

湯峰温泉—山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 **湯の峯荘**

和歌山・新和歌浦—海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 **萬波**

徳島・鳴門—うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 **鳴門**
政府登録国際観光旅館 **鳴門公園ホテル**

紀北・橋本—ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 **紀の川苑**

大阪・泉南淡輪—魚つりに ゴルフに
観光旅館 **淡の輪苑**

大阪・なんば—清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222



南海電鉄

老若交代

どうしたことか、この頃しきりに三太郎の『梯子段女房の目方だけ軋み』を思い出す日が多い。造作の結構さがよくわかる皮肉である。寧ろ軋むから、耐震に強い建築もあろうし、安全を期したのもあろう。建築だけでなく古いから駄目だと刻印を押すわけにゆかぬ場合もあろう。逆に、木の香新らしいだけが満点とも言えまいし、想が若いから完全と

ばかりも言えまい。黒光りする柱に耳を傾けると過ぎた時代の尊いささやきを聞けることもある。老若交代のときだと、あちこちによく声を聞かすが、私などの経験から申せば、若気のいたりとは言え、ようもあんな生意気なことを行動したり高言したりしたものだ、と年寄ってから、冷汗三斗ということもある。

子には子の納得ゆかぬ親の義理
ものおじもせず氣象台雨と言う
土の香が腕組んでゆく五月晴れ
平凡に辞めて言葉が少し過ぎ
辞めさして貰う理由を羨まれ

中島生々庵

川柳塔六月号

座右の句

握手など知らない祖母の低い腰

(十郎)

私の句

他人の死がこんなに軽い立ち話

川上大輪

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

老若交代

私は今こうおもつ

中島生々庵

菊沢小松園

■川柳太平記(3)幕末開化期の模範川柳人

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(二丁)

東野 大八

川柳塔(同人吟)

西尾 葉選

水煙抄

正本水客選

秀句鑑賞

「同人吟」
水煙抄

黒川 紫香

八木 千代

56年度二賞候補作品中間発表

生命の一頁

麻生 葭乃

葭乃先生を想つ

板尾 岳人

私は今こうおもつ

菊沢小松園

毎月の川柳塔誌の「一分間の柳論」の記事を人並に熱心に読んでいたが、正直に言っておつとりと御上品に育つた方々が多いと見えて自己反省の修養的な傾向が多い。そうした至極、無風状態の裡に、五月号に宮西弥生さんが書いておられた、遠慮深い筆ながら従来と違つた思い切つた主張にはいささか驚かさ

れた。はつきりと言葉に衣着せぬ意のある主張には、さすがに時代の空気に触れた新風を川柳塔のみならず、他の各柳社へも警告として十分に受取れるものと感じて本当に印象的だつた。

しかし私の言いたいのは今の現状で、おつしやる通り直ちに第一線の老体に退陣して貰うとして果していわゆる時代の若い新人がその総てを任されて円満な万全の発展への布陣が出来得るのであろうか。色々と各会、各部の個々の事情もあるであろうが、一步退いて新布陣の総てを信頼し、その実力發揮の場を提供して安堵して遠くから眺めておられるとしたら、もとより望むところであり、双手を上げて賛成する。

が、それも全部行かないところがあるのも本当である。その過程として若い力を充実発

愛染帖	橋高薰風選	(44)
柳界展望			
「職人」	江城修史選	(47)
一路集「暴走」	横山一声選	(48)
「雨」	河井庸佑選	(49)
初歩教室	本田恵二郎	(50)
大萬川柳「節約」	川村好郎選	(52)
本社五月句会			
各地柳壇(佳句地10選/中川滋雀選)			
一分間の柳論	稲田豊作	(51)
雅号ぶっちゃけばなし	荻野鮫虎狼	(53)
編集後記	石垣花子	(63)
		薰風・酔々・鬼遊・史好	(65)



座右の句

片肌を脱ぎ双肌になる太鼓

私の句

連休の一日 妻の舟にのる

(薰風)

文川 一念

揮って峻しいありのままの時代を認識して、老廃詩人連をして、いつまでも情眼に浸る愚を悟らして、自ら居たたまれないようにする事だって出来る。実力は総てであり超越する女でもよい、男でもよい、古参と言われる人達はそれを望み、一日も早くその日の来ることを待望している。

弁慶よ出でよ、巴御前よ出でよ、小手を翳して待っているのだ。責任のある第一陣など老人向きでないこと位は当人達は先刻より御承知の筈である。老人ホームなどには勿論新風は吹かない。こうした快活な意見の出ることは新人台頭の現れとして喜ばしい限りであり、むしろその遅いことを遺憾に思う位である。陽春五月、この麗しい言葉を口火とし、新人パワーの烽火をどしどし遠慮ない思い切った意見を希望してやまない。多くの老境の連中もそう思っていることを記憶して欲しい。

時は流れ、時代は移る。こうした判り切った本質的な言葉さえ今の若い人達が創ったもので無い。時代遅れと言われ、過去型の中のみ生きていられる今この老人が、元氣な時分に創ったものだから不思議だ。地球は円い。過去、現在、未来へと回る。そこに何の渋滞は無い。それが宇宙であり、人間の住む世の中であり、現実の姿である。「限り有れば吹かねど花の」一氏郷のミニッツイことはと現在には誰も思っていないと私はおもつ。

川柳塔

西尾 栞選

松原市 谷 垣 史 好

杜の奥に黒い狐がいた早稲田
ママさんに42キ口を羨まれ

弱い男と甘いリンゴが多すぎる

軍艦に勝てそうにない自衛艦

床の間の花とトイレに飾る花

満月へ疑心暗鬼がなかつのり

尾崎市 黒 川 紫 香

アリバイのない一日の恐しさ

流れ星明日は外地に居る私

過去帳にいつか書かれる墨の色

ガス自殺出前の鉢を置いたまま

読み捨ての新聞読んで又捨てる

大阪市 本 多 柳 志

三寒四温着たり脱いだり重ねたり

満員車の中へ良心捨てて来る

早よ行かな散りまっせと交通社

三十年の苦勞を孤児の中国語

議事録に載らない議事で議場もめ

倉敷市 田 垣 方 大

おぼろ月デートを快よく受ける

列外を歩き認められようとす

春闘を町工場にうらやまれ

先廻りして上役にうとまれる

ゴルフには時間を守る若社長

青森市 工 藤 甲 吉

奢られて使い込みとは知らなんだ

鳶が鷹生めば鷹また鳶を生み

盃の底へ想いをみな沈め

曙もよし暮もよし山の貌

山鳩がとぼけて啼いて背戸の山

今治市

長野 文庫

応援の過熱にかたくなつて負け

大袈裟に投書でなじる水溜り

連れ立って来て強引な寄付募集

いい庭とのぞけば突如犬が吠え

万円札裸のまま巾効かす

今治市

月原 宵明

マンションと呼ぶ高層の鶏舎の灯

当然の如く遅刻をする名士

六十で女に惚れた意外性

日本は桜終れば鯉幟

核家族哀れ主役は痩せ細り

倉敷市

水粉 千翁

はにかみの色に出にけり桃日和

散り急ぐまじとはあわれ花ひらく

押せば押しかえす感情入り乱れ

くつろぎの広さとなつて友と居り

頂上を踏んで味方を見失い

兵庫県

遠山 可住

赤線を引くと疑い深くなり

満開の花に囲まれ乳搾る

朝市の活気長寿の国になり

先祖の血知らず身内に鬼が住む

日付入りの時計の日付が読み切れず

じゃんけんで踏絵の順をきめました

桜咲き中山寺でさらし買う

傘さして山の向うを見に行こう

四つ辻に残る父と子の絆

磯笛を吹くのが生きるタイムリング

鳥取市

河村 日満

霞乃先生を悼む(二句)

ご臨終の手をどの弟子が握りしや

落ち着いて探せば電話帳確か

病人をかかえて安い保険料

産休に触れて同権論沈む

札束で打つ人類の泣きどころ

新宮市

大矢 十郎

建売りの主張肘張る門構え

そんな事されては嬉し袖の下

当用漢字いくさに使った字が増える

機嫌よく帰れば機嫌悪い妻

現世の半分を見たアルバイト

八尾市

高杉 鬼遊

靖国へ議員が参る怖い夢

テーブルを飾るきれいな盗聴器

父ちゃんをぼろくそに言う嫌な人

味の素までが昔の味でない

珍客が来て鶏が家出する

香川 醉々

岸和田市 高橋操子
花の道歩けば茶店につきあたり

緋もうせん甘酒があり京の梅
文之助茶屋への時間くり合せ

梅 桜 桃とハンドルの娘誘いに來
月が瀬の梅は湖水の色へ咲く

大阪市 中川滋雀
胸に掌をあてても昨日は昨日なり

花冷えの雨を聞いている猫の耳
味噌を買ひ忘れた朝の老い二人

絵にならぬ姿で妻は爪を切り
頼まれる内が花やと他人は云う

桜井市 岩本雀踊子
ボツクリ寺の願いは真面目だと思ふ

徴兵のない大空の鯉のぼり
父よ母よと水子が叫ぶ彼岸花

敵も味方も作らない失語症
右よりの父で陸軍伍長です

大阪市 小出智子
ある期待子には苦勞をさせるもの

子離れがなかなか出來ぬ春の雲
やさしい妻になると言うのはいとやすし

親と言うさみしきがあるぼんのくぼ
胸のいたみ足の痛みより辛し

大阪市 河野君子

落花さかん失うものが多すぎる
これからの地獄は知らぬランドセル

五月人形飾っていつか討たれよう
二日酔い気圧の谷より抜けられぬ

髪切つて罪の意識を軽うする
米子市 八木千代

面影を辿ると弥陀の眉あたり
ライバルが振り向きもせぬ風の中

別れ決めた日でも鏡を光らせる
人違いで欲しい噂をききに出る

運命線 試練と根を競わんか
和歌山市 野村太茂津

屁理屈もヤクザから借る横車
ぶきつちよな借り方だから貸してやる

ユニークな個性に随いてゆくスリル
マスコミが仕立てた偉人の裏を読み

点字追う指が明るい歌にする
竹原市 山内静水

忠告は忠告男たらんとす
サクラサクラ狂いきれないワンカップ

棟梁の目に若いもんの軍手
したいことさせてもろうて生かされて

ご院主に許しを得たり釈静水
倉吉市 奥谷弘朗

似てくれと願う子供も無くて老い

花よりも団子の意味が解りかけ

周囲にもぬくもり送る方の人

翔ぶ方はあきらめ尻を振るアヒル

条件を古い頭が来てまとめ

竹原市

小島 蘭 幸

アルバムのあなたと私裏切れぬ

春闘よもう一人産まれますのんや

おしめ取る特訓ついに梅雨に入る

すべりんこ子はスタミナがあり余り

長女次女レモンがひとつふたつある

岡山県

嘉 数 兆代賀

断絶へ未練のあろう筈がない

気まぐれな風にも廻る風車

つまずいた石のことばを聞いている

三度目の話だ恩師も老い給う

花散つた道で未来を踏んでいる

富田林市

岩 田 美 代

見つけたら仏の眉にある愁い

春風に肩を押されて紅を買う

錯覚にどっぷり浸かった素晴らしき

信じてた九官鳥もあほうと言う

前向きの姿勢は絡む事ばかり

美称市

安平次 弘 道

退屈なドラマ善人ばかりいる

老婆心嫁との溝が深くなる

国境がもめても渡り鳥は来る

ヘルスメーターやせる努力を信じない

おみくじはみんな違つた寺巡り

高槻市

若 柳 潮 花

好きだから少うし距離を置いてみる

年子三人かかえた欲は寝たいだけ

燃えつきた恋でも人は聞きたがり

酔いさます窓はネオンの風が吹く

ひとりまた今年のサクラ見ずに逝く

京都市

都 倉 求 芽

春雨の中で木蓮座禅組む

ヒロインになつて峠の花吹雪

生きるための稼業を都会の風物詩

旅土産一つ二つがまた足りず

何事ぞビーポービーポ花の下

神戸市

中 村 ゆきをを

障害をもつ子ヘクラスの手が温い

気疲れの一日だった仕舞い風呂

好き放題云える身分にいて悩み

田を売つてアズキ相場の穴に落ち

シルバーシート譲る気配もない二人

奈良県

村 上 春 巳

鼻つたれ小僧には意地があつたけど

忠孝を教えず先生殴られる

つくし剝く母娘の話猫が聞く

桜もう満開ですと風邪をひき
知恩院妻の歩巾の女坂

竹原市 森井菁居

邪心捨てたらバーベルが軽くなる

決断をつける竹馬の友が居る

現実に戻りたくないペンネーム

いい人を通る男に主義がない

添いとげて間違いない妻の笛

寝屋川市 江口度

げんこつをやりたい時に賞めてやる

非常口役立つ時に悲しみが

貧乏くじを引いたと思うのは他人

子のしつけ大人の定規あてたとて

優雅な息子就職浪人を考える

八尾市 宮西弥生

円満がつづいてはけ口探してる

若者につかず離れず鬼でいる

大阪の灯を見て忽然腹が鳴る

中年を一つの区切り鎖解く

独身のまわりに鬼が出て困る

堺市 高橋千万子

衣替え春の歩道のやわらかく

きれいごとやっぱり心残りなり

合格に敗者今頃どうしてる

仕送りに二、三禁じる事をかき

手にみやげ腹に一物ある歩巾

西宮市 藤村メ女

草に寝て草の枕は青い夢

同窓会皆はなやかに老いている

美しく老いてゆく日の彩を撰る

ふところの銭に負けてはならない灯

旅に居て夜空に一つ母の星

八尾市 高橋夕花

花ぐもり夢はとづくに捨てたはず

惜しむらく花のいのちへ風の床

ひとごとのように思えぬ散る桜

言いたい事云えて葉ざくらすがすがし

クラス会みんな明るい姑となり

寝屋川市 柴田英壬子

京の雨グレース王妃もシンデレラ

ベッドから抜け出し桜の下で逢い

恐ろしいレールをひいた親の地位

ご予算はいか程ですか宝石店

控え目に炎えて小紋の高瀬川

大阪市 本間満津子

ばあちゃんど云いに飛んで来た二万キロ

日の長さご飯一合炊く生活

自分には見えぬ背中に齢があり

大安の天気暦に書いてない

成田着長屋へ帰る顔でなし

島根県 西村早苗
昼の風呂小さな奢りとも思う

閉じた眼の涙は悔いをまた消せず
ぼけてくる春の陽だけでない頭脳
めがねふく男にすぎがみつからず
特売という字に弱い人ばかり

富田林市 中村優

傷心をロマンに替えて月登る
百円ライター本音の縄のれん
世話焼が範圍を超えてきた恐さ
花無常ロダンのポーズとる労使
改憲論うなずく奴もいる平和

神戸市 山口美穂

だまされてあげようきれいな嘘ならば
身勝手な人と思うておく受話器
ワイングラス少し甘えて喋り出す
倅せかと夜の鏡にきいてみる
あきらめたと日記に書いたのも真実

富田林市 板尾岳人

十字架の釘錆びていた山の峰
恋人の耳から峰は雨になる
キリストを欺したりしない山の水
射程距離だんだん遠くなる山で
風船が割れると山は雨である

倉敷市 野田素身郎

臘月試しに小指からませる
定年退職解放感と淋しさと
淋しさを紛らす酒だ隅でよい
漫才見終り元の冷たい仲になる

東大阪市 市場没食子

ポートピア81へ招く風見鶏
逆さまに切手を貼って気がとがめ
朝市へ来てるドテラは旅の人
女子ランナー乳房もリズムミカルに揺れ

藤井寺市 児島与呂志

歯の痛み平凡な身に神罰か
反論を口ごもりつつ出た夜道
貧しさがもう気にならないワンカッブ
台本に書きそこねの無い日を暮す

宝塚市 傍島静馬

円満な夫婦に喋ることがない
気が合うたようにふるもうてるとも知らず
眉しかめても美人は風情があるそうな
好き同士逢うて話ごとぎれ勝ち

大阪市 金井文秋

ノイローゼ悪い結果を出し急ぎ
従いて行けずにメンバーから抜ける
遠来の孫をもてなすポートピア
おごられるのは嫌だしおごる義理もなし

堺市 藤井一二三

桜花爛漫土の情を無駄にせず

甲子園の土に茶の間は泣きに立ち

北風は陛下の帽子には吹かぬ

旅に踏む土に民話が埋めてある

呉市 林野甦光

椿咲く丘の起伏が遅しく

ひと時のしあわせに酔う使い捨て

福袋貰うおしろい剥けている

アリバイに言葉を用意して帰り

大阪市 川口弘生

雨男ちよっぴり降った誕生日

四ヶ月に誕生日がある華やかさ

妻の目にキャッシュカードに棲む男

女房に卑弥子みつける凡夫婦

下関市 国弘半休門

不肖半休門に叙勲の御沙汰あり(二句)

受章した喜び母の日を想い

兄弟でいっち極道が叙勲沙汰

沖縄でハブ警報に震えて来

出雲そば腰の強さも一番粉

大阪市 西森花村

人類愛悪魔もそない言いました

食いだおれの大阪にある道修町

軍備競争地球が割れるかも知らず

人間も真珠も屑は多数党

松江市 小林孤呂二

管理職とぼけて凌ぐ手も覚え

公務員の保護色さがすときは危機

本当のやさしさ言葉の綴ヒラにある

スイートホーム檸檬の香り満ちている

松江市 柳楽鶴丸

レーザー光線がヒントになった色

新入社を減らしてロボットを入れる

風が写せるカメラなら買おう

青い鳥の声がカセットから流れ

松江市 恒松叮紅

責任がないから孫を可愛がり

念書などいらぬ男の固い口

花街の夜風は人を狂わせる

熟年でまだ働けるルーブタイ

松江市 舟木与根一

春宵一刻悪夢になって醒め

満山桜目をつむる鬼瓦

平等の筈が席順落ち着けず

筋書きがなく汗握る甲子園

米子市 石垣花子

城下町二つに割って川流れ

輪の中でカゴメ／＼の鬼が泣き

見合から育てた愛で古稀と喜寿

薄命の定め背負った目鼻立ち

物豊かなるあけくめで愛に飢え

人類という世のエリートに生まれ

商魂は順風満帆時代の波に乗り

捨てて勝つ勇氣はやがて春巡る

米子市 林 瑞 枝

桜前線日本列島人うごく

ひらめきが停れば野獣となる男

十代の非行遠巻きして騒ぎ

ストレスがたまりおんなの口に乗る

島根県 藤 井 明 朗

酒うまし今日一日の嘘に酔う

年甲斐もない淋しさと雨の音

意地張ればお茶にしましよと助け舟

腹立てる無駄を知ってて繰返し

島根県 堀 江 正 朗

お粥炊くゆきひら老母の顔になり

寝たふりと知っているから独り言

ワンマンでよし健やかな寝息聞く

体調のいい日は軽い葉包紙

島根県 堀 江 芳 子

絆という鎖が重い日の疲れ

美しく老いたし花の水をかえ

啄木忌亡母の記憶が重い春

落椿愛の笑顔のなお貧し

大阪市 江 城 修 史

ハッターも時には武器として温め

横綱の夢横綱の胸借りる

新製品かばんに詰めてノルマ追う

鍵っ子へ道草叱る母がいず

鳥取市 小林 由多香

喬木を見上げもせずに蟻のぼる

食べものがあるぞと鳩がストの駅

どうなってるの検事が刑事に捕えられ

けんらんと咲かせた鉢は素焼なり

島根県 小 砂 白 汀

憎しみに変えてはならぬ愛を抱く

人情にもろく端役を繰り返し

はったりへ九官鳥も思案顔

風紋へ母も知らない人を連れ

米子市 小 西 雄 々

その幸を逃がしてならぬ鞭を打つ

飼主が犬の喧嘩にまきこまれ

聞き流す言葉もあってけじめつけ

勝って飲み負けては飲んで男なり

大阪市 室 谷 徹 舟

暁を覚えぬ春眠職を辞す

クイッククイックスロー老人大学平和なる

胸上げ屋でもやろうかとアルバイト

そのブーム漫才調の子を育て

神戸市 仲 どんたく

松原市 玉置 重人

盆栽へたつぷりと水失業中

コマージュナル日本こんな富める国

寿の筆の跡から春匂う

春の風方程式は忘れよう

鳥取県 鈴木 村諷子

みんな来て聞けよ小川がささやくよ

潮に乗り漁信西から南から

どうしても酒の記憶が湧いて来ず

北国の漁村岬にしがみつ

鳥取県 川崎 秋女

距離を置くその床しさに魅せられる

人間に挑戦うちのアブラムシ

純白の愛へ計算止めにする

尊敬をします女の良い言葉

豊中市 安藤 寿美子

持重りするのに男浅蜷買う

どっかりと構えて私語を気にしない

妻の目をそらして午後の靴をはく

干物売る海女セーターがうしろまえ

大阪市 那須 鎮彦

俺が走ると太陽も走る

大人って嬉しい時も泣くんだな

いい講座聞いてたつぷり腹が減る

あたり前に働く美しいと思う

大阪市 神夏 磯道子

てっぺんは見まいと思うきついな

春うらら鎖が重い犬の恋

限られた範囲でつるが曲りだし

ゆっくりと歳月を見る水車小屋

宇部市 平田 実男

早大商学部スキャンダル(一句)

ソロバンをはじき損ねた商学部

生活の本音が物干竿に見え

嫁ぐ日の挨拶父の目が見えず

アリバイに役立つ日記とは淋し

大阪市 柳原 静香

娘が病んで私に春はまだ遠い

娘が病めばただに哀しき桜花

市場かご花摘む孫のおくれがち

聴えない耳で話の腰を折り

鳥取県 林 露杖

居酒屋の徳利の罅は気にならず

よく出来た嫁と言われる蔭で耐え

節介は嫌い放つとくのも不満

花曇り胸に蠢くものを抱き

大阪市 西川 善紫

横着と云うものフロックを当てにする

勝手に勘繰り腹を立てている

南紀の旅(二句)

一面に木の香漂う露天風呂
人形の鬼もカメラの一齣に

和歌山市 若宮武雄

血走った眼では解けないもつれ糸

世の中に鬼も仏もないと知る齡

賽銭も乞わない地藏こそ仏

仁王さん桜咲いても同じ顔

和歌山市 浦野和子

生き難き世へひよつとこの面買いに

太棹のさわりへ人形身を振る

伎楽面シルクロードの旅の果て

攝理をも愛をも花は裏切らぬ

柳井市 弘津柳慶

妻が居たら灰皿のゴミ許さない

外は雨御燈明へ手を合せ

ピカピカの一年生でしゃちこばり

旅楽しここにも石佛鎮座まし

兵庫県 河原みのる

大臣はスゲ替えの効く首をもち

モーションへ鴉は石の距離見抜き

少々の霜は覚悟で咲くコブシ

墨摩りが長引いている包む顔

東大阪市 斉藤三十四

少年の迷いに内緒ひとつある

夫婦酒で苦勞の過去も歌にする

知徳体ゆとり教育すると云う
ストロウの男女の恋は走り出す

東大阪市 森下愛論

酒とろり命が延びるありがたさ

月収の割に呑みしろよく廻り

孫の世話しすぎて嫁に呪まれる

入園の孫のリユックに夢を詰め

出雲市 原 独仙

口実を吃る電話に見抜かれる

仁術を算術魔術で誤魔化され

父と子がテレビで対話する野球

短軀われ宿の浴衣は規格品

平田市 久家代仕男

退職の今日から胸を張る野良着

下駄履で来て綺羅星の靴に逢う

国体の誘致で届く花の種子

横ピンタくれた老師を圍む酒

大田市 藤田軒太樓

声高になつて団交夜を徹し

つまるとこ持てる強身が折れる破目

心外な話に合点だけはうち

先方の誘い手の内読まれてた

島根県 錦織文子

雨だれものんびり春の音で落ち

自分だけに聞かせる愚痴も老いなるか

妥協しながら自我を捨てきれず
空が高すぎて倅せが届かない

岡山市 時末 一 灯

酒抜けば酒の上だけだった友
働ける日が頂上と知る病後
窮すれば通じた風呂の窓の月
必殺の弾丸が余白に埋めてある

奈良市 宮口 笛 生

職退いてスト反対派へ回り
苺摘む腰の痛さは云わぬ欲
一人旅桜前線北へ伸び

缶ビールと駅弁海が見えてくる

大阪市 藤田 頂留子

感傷も他人ごと桜散りはじめ
本心が言葉の裏に見え隠れ
値札つけ替え雨足降り止まず
見るだけですみそうもない特売場

島根県 梅 みどり

よく光る星とむきあう命日へ
水色の空へ私のちぎれ雲
待ちわびる足音むなし夕桜
おぼろ月ほんのり心がまよいそう

和歌山市 垂井 千寿子

追伸に小さく貸した物に触れ
人生の少うし時刻を止めた旅

人形になって炎をやり過ごす
増産をコンピューターに急かされる

大阪市 津守 柳 伸

不発弾抱いて女は生きのびる
ロマンには遠いお方と思えども
ピストルがあれば己れを打つだろう
苦勞にはついて行けない泣き黒子

和歌山市 松原 寿子

掌の甲へ涙の毬は透き通り
あたたかみ紡ぐおんなの糸車
理非わきまえ言葉ひとつが思慕となる
花吹雪みごとに舞うて修羅の旅

和歌山市 福本 英子

桜咲く明日の生命を信じてる
自殺する気は更にはない三段壁
狂う日を見透していた女の髪
雀だんだんスマートになり四月

京都市 山本 規不風

団地族他人の暮しを地図にする
自分だけ不幸に思える時の危機
恋人を迷わしているルービック
はぐれ星スペースシャトルに従いて来る

倉敷市 稲田 豊 作

給料袋開くと紙幣が蝶になる
別居して嫁が肥えたと言うている

時代劇にニユース特報出て駈ける
やりくり疲れ妻の肩叩く

大阪市 天正千梢

戦争中玉子のぬきうまかりし

ひと廻り大きく見える春の山

流されて流されて河口で倉を建て

ライバルもあえいでいるとはご存知か

守口市 野呂右近

罪消えるとは思わねどする写経

半分の心は隠すドアチェーン

節くれた指に嘘など隠されず

味気ない会話にさせる白マスク

堺市 大道美乙女

娘にかかる電話にきき耳たてる壁

人生の起伏がつづくいばら道

母の川満まんとした愛たたえ

昇進の背に突きささる無数の目

松原市 北野久子

清らかな恋なればこそある目ぶた

席取ればたばこ嫌いが横に居り

音絶えて言語も乱れる恐ろしさ

音の無い孤独へ桜のあたたかく

東大阪市 崎山美子

吉報がとなり近所へつつぬける

珍しい体験マイクがとり囲み

気楽だとは本人少しも思うてず
片方の耳は本音を聞きたがる

八尾市 飯田悦郎

床に伏し妻の舞台は回らない

ボンコツの男やつぱり四季の酒

うそ言わぬ男で出世あきらめる

自画像がくずれ日銭を鳴らして

大阪市 河井庸佑

ひとことが多い女で嫌われる

コンマ以下話しがつかぬ会議室

筋書きの見えたドラマにくふうする

不覚にも懐刀に突きさされ

倉敷市 藤井春日

左遷の地此処は櫻の花盛り

泣けよ泣け声張りあげて泣けよ泣け

罪詫びる水子地藏に風車

愚かにもお金で他人を評価する

岡山市 岡村久志良

遺言と云えば娘は眼をそらし

亡母恋えば薄墨彩の花となる

古方さんを憶う(二句)

柳話でのべた褒め脊ながむず痒ゆく

過激派か芝の芽舗装持ちあげる

生駒市 草深酔升

税が苦になるほど持ってみたいもの

鉢に水やれと氣を揉む寝たつきり
十円の値引きへ並ぶ市場籠
老いらくの生きねばならぬ医者通い

貝塚市 行 天 千 代

若き日の返らぬ夢を今も見る

友の死 (三句)

舞い狂う雪といっしょに友は散り
氷雨の日友を見送る野辺送り
死に化粧まぶたに残る友の顔

姫路市 大 原 葉 香

病院の中まで春が迷い込み

春の街ノーパン喫茶へ墮落する

救急車街の平和を乱し着く

ポケットベルなつてノルマの鞭という

三重県 川 上 溪 水

酒だけが味方と思う失意の日

どうにでもなれとも思う齒の痛み

一生の頼み何度も借りに来る

肩の荷をおろせば老いが待っている

仙台市 川 村 映 輝

人間に飢えて暴走族となり

追いつめて死ねば死ぬことないという

あるものが無いから頭も鈍くなり

氣が強い癖に大事なことを忘れ

大阪市 欄 蘭

節約へ管財人の力こぶ

裏のうら覗かれ筋書通りにはゆかず

酸素吸入あかんあかん十日もち

頭の体操キューブ一面やつと出来

大阪市 北 勝 美

絵の鯉が角度で変る応挙寺

長雨に庭を埋めてる落ち椿

折詰めを家で食べてる雨の音

雨続き桜と漫才泣き笑い

岸和田市 原 さよ子

ふんざりがつかず無配の株を持ち

地下街を迷い続けてもとの場所

連休の疲れを持って出勤し

勤続を表彰されてさびしがり

竹原市 古 谷 節 夫

はぐれ鳥わらべ唄なら知っている

べんちやらが言えず日陰の山茶花で

高飛車に来るから受けて立ってみる

妥協した付けが後から追ってくる

京都市 山 本 桐 下

哀歎のいずれにも出る里の唄

封印を切れぬ妻子の瞳がきれい

ふだん着の写真ににじむ夫婦愛

友の計をうたがい金魚に餌をやる

京都市 松 川 杜 的

一刀が桜を散らすロケーション
似顔絵へ程よく書いてく皺の数
だんごの方でよし妻とまた桜見

高槻市 福田丁路

良心を麻痺さす額の袖の下
暁に祈って欠伸噛み殺し
春雨を避けてデパート漫歩する

榎原市 岩井本蔭棒

安産の祈願石段踏み外し
世に出れば赤貧の日もなつかしく
お互いに金の走狗よ朝の駅

諫早市 原田明春

二DK押入れだけの隠れ場所
メモ書いて妻引継いで行く旅行
眼鏡かけて見ても家計簿赤字なり

豊中市 増田次章

偶然の握手それからファンになり
ゴネ得を教える闘争くりかえし
嫌われて億を遺して旅に立ち

玉野市 小谷仙山

一山に盛つても上と下積みと
老人会一年生が世話をする
自腹切つて尻を合せた会計簿

岡山県 川端柳子

怒らない父に恐怖を覚える日

日本を一步も離れぬ靴の向き
楽隠居ならぬ日々にも感謝する

松山市 谷真風

躓いても転ばなかつた春の風
亡妻よお前の座布団置いてある
一つ一つ包んだみかんと一山と
ベレー帽金の話はよしなさい

今治市 越智一水

落着いておれと静かに春の雨
足袋ぬいで女半分気を許す
ほどほどに聞いて話して世を渡り
耕運機春だ春だと音を立て

寝屋川市 宮尾あいき

十六人の孫がかなでる古稀の詩
桜並木防衛庁の杭目にささる
これからの一步一步は後退か

奈良市 森田カズエ

生いたちの過保護の足に暴かれる
空白のままに置きたくない余生
添え書もあつて友情かみしめる

島根県 大森孝華

年俸の重みしみじみ威圧感
満開へ無情の雨は降り続き
ふる里の平和ささやく花の町

姫路市 植村客遊子

裏表知っているからコップ酒

琴の糸切れて師匠の手がふるえ

北国の生れだと云う酒の量

貝殻の孤独を救う波の詩

大空に夢を描くのに邪魔な雲

迂闊にも素通りさせた耳を悔い

後ろ指声もかけずに行き過ぎる

出来栄えは禿の部分を大写し

約束の朝飯前が笑わせる

夜ざくらで飲めぬ男がくしゃみする

女ふとスリル求める春霞

割り切って生きる女のジンファイーズ

人間の智恵人間を惑わせる

一幅の墨絵山峡雨の宿

健康美自然美躍動美の祭典

パン食が日本の心も替えてゆく

ライバルの慌てる気配など見せぬ

切り札の投手へ日本の瞳を集め

みの虫の風来坊にもある苦勞

和歌山市

坂口公子

梅本登美也

金川満春

鳥取県

内芝登志代

和歌山市

守口市

羽原静歩

竹原市 時 広 一 路

笠岡市 松 本 忠 三

松江市 梅 本 登 美 也

金 川 満 春

鳥 取 県

内 芝 登 志 代

和 歌 山 市

守 口 市

羽 原 静 歩

坂 口 公 子

梅 本 登 美 也

金 川 満 春

鳥 取 県

内 芝 登 志 代

和 歌 山 市

守 口 市

羽 原 静 歩

坂 口 公 子

梅 本 登 美 也

金 川 満 春

鳥 取 県

内 芝 登 志 代

和 歌 山 市

守 口 市

羽 原 静 歩

練り供養みんな仏の目になって
借り物の言葉が似合う七ツ紋

暦より肌で季節の区切り知り

老人の仲間に入り弥陀の笑み

弁当に妻のパロメーター教えられ

寝そびれて亡夫の思い出去来する

修理中の歯マスクでかくす花の冷え

生駒から来たのか鶯庭で鳴く

待たされていと丁重に断られ

バスで酔うよりはと母さん留守を買う

庭つきに住んで乗りかえ乗りかえて

女性課長音楽好きの声徹る

製図から逃げ出す順に出世する

六十路まずタイムレコーダー打ち忘れ

降らさじと思う心や花衣

熟年という言葉あり胸を張り

クラス会右と左に下戸上戸

三千院春の愁いを捨てて来る

揚げ雲雀五十年の走馬燈

加賀市

細呂木 魯 木

大 阪 市

横 地 雅 風

町 田 市

竹 内 紫 鏑

和 泉 市

井 阪 東 天 紅

守 口 市

羽 原 静 歩

提燈のめし屋の文字に血が通い

倉敷市

小幡里風

兵庫県

辻文平

手をつなぐ夫婦の坂がすべりそう

ごめんネと踏まれた足の方が云う

さよならの握手が長い流れ星

姫路市

梅裕庵不酔

海南省

牛尾緑楼

一日の長の辞令でとじる幕

泣く親も笑う親もあり産んだ親

美辞麗句俺の弔辞を誰が読む

鳥取市

有田とし江

青森県

五十嵐操史

想い出は心にしみる春の雨

よもぎ摘む手元に春の土匂う

気晴らしの砂丘でつむじ風に合い

富田林市

和田維久子

兵庫県

藤後実男

一行のペンに絆の刻きざむ

天国がこゝにあったよ花の下

男であつても父親でない背をみつめ

倉吉市

渡辺菩句

岸和田市

島崎富志子

過去の愛は僕には源氏物語

犬に肉食わせ不景気をにくんでる

僕のとこが好きなのか貧乏神よ

大東市

土岐トク子

大阪市

西出楓栞

傷心の胸に聖歌の和に合わす

息子の脊のかげりにしかとこみあげる

六十路きて亡母の六十路を憶うなり

春の陽へ躍動どころかねむくなり

A地点に立たされているランドセル

青空と暇折り合わず花終る

七尾市

松高秀峰

上げ下げの公定歩合にある政治
優勝して握手サインが上手くなり
ネオンの灯男を誘う曲り角

岸和田市 清野 こう

戻り寒花の吐息が聞えそう
言い勝った心むなしさ残るだけ
母と娘の会話楽しい台所

岸和田市 古野 ひで

割り勘のつきあい続けて五十年
甲子園我が家のリズム狂わせる
過去の事みんな忘れて老いの春

鳥取市 岸 本 無人

齢のこと忘れて渡る丸木橋
装えば蛹も蝶になって翔び
コネの無い役人地方歩かされ

出雲市 吉 岡 きみえ

春だと言うに倒産するはなし
土工さんもさくらの下でひるのめし
今日よりも明日の歩幅をもつ女

枚方市 水 野 弘

転勤を仄めかされた四月馬鹿
私鉄ストラジオ持参で糸を垂れ
一つでは足りぬ眼鏡の主となり

大阪市 神 田 秀 峰

太陽の恵みを知らず開病記

再生の効く身体にと手術台
止められぬニコチン中毒パイプ党
河内長野市

井 上 喜 酔

語らいは夢も混って和を深め
指名料女の匂いかがすだけ
幸福なこころの地図は羨まれ

岡山市 井 上 柳五郎

人通りふえた地下街俄か雨
暖くなればと待った春に逝き
二次会へ声かからない影を踏み

唐津市 新 岡 回天子

悠々と海原世界を飛んでゆき
都市全部バクチに明けてねむい朝
メキシコに入ればバスもラベル貼り

大阪市 清 水 健 司

遠くない俺の息子だこの音痴
スピーチが長くて腹が待っている
腕前を見たら給料高すぎる

鳥取県 清 水 一 保

人の下に人を作った天に泣き
我が家の女太閤記も出来ん
中流と云う事にして日々励み

倉敷市 斎 藤 通 風

神前に立てば無心の掌が響く
驚いてみたよ命は一つだけ

元旦の日記今では虚偽の欄

島根県 大野 醉夢

高く低く母の眼和む木馬館

総絞り顔はともかく高価なり
別れると一言云えず長い道
理想なら誰でも言える酒の席

西宮市 野呂 鶴汀
鳥取県 森田 布堂

円周の無限を人類駆けて生き
夫の振る豊かなタクトの中に生き

枚方市 稲葉 星斗

春風のソフトムードに花も酔い
卒業生送る母校に花吹雪

戦友の慰霊日の丸掲げられ
天皇にして手さぐりのご研究

熊野市 坪田 冬花

もう少し歩いて見たい春の宵

羽咋市 三宅 ろ亭

二一天作の五そんな昔を思い出し
信仰の妻は火の粉を怖がらず

島根県 木村 はじめ

一年生もう道草の連れができ
受付の声も弾んだ入学日

覚悟まだ出来ないままに古稀を過ぎ
五十年夫婦に茶碗欠けていず

出雲市 石倉 芙佐子

岡山県 直原 七面山

人形は赤いピストル持っている
コンピュータの答が返ってくる無情

彼と来て旅豊か
取り敢えず反対し

正木 水客

切れ味を試す刃は懐に

岡山県 岩道 博友

落人部落水芭蕉にうずめられ
遠廻りしたなと縁を大事がる

怒っても同じ結果で胃が痛み
高ぶった心を場末の灯に沈め

逆らえば掌冷たく握らされ

出雲市 園山 多賀子

目隠しをした鬼になるくじを引く

濯ぎ過ぎ見えないしみが浮いてくる

統統編までも出そうな夫婦像

この頃の握手日本も板につき
ひと筋の趣味の思い出なつかしく

浜田 久米雄

横文字へ昔覚えた英語力

この辺ですこしは法螺を交せておき
漫才の早口をまた聞き流し

夜桜の更けて不満な風のうた
寡婦と犬美事を対話四月の陽
ひたむきな農の勲章曲る腰
強引なタクトで春のスト走る
千匹の蛇が旗振る花の頃

ソーラシステム屋根重そうな貌でいる

入魂の技田中は生きている
春の風老母の背筋を丸く撫で
老妻の手綱ほどよく遊ばせる
寝転べば話がはずむ老いの友

思讐を越えた獲物にある温み
一度あることは二度ある寡婦の城
読み書きの主婦から炊事どないした
肌の荒れ化粧品だと気がつかず
あれやこれ読みが乱れるお人好し

余生とは言いたいことが言える齡
ストレスが少し溜った血圧計
自己抑制そんな慮念も遠くなり

尼
緑之助

本
田 恵二朗

伊
藤 茶 仏

若
本 多久志

戒めがまだ時おりは要る余生
不死の道求め合掌の手を洗う

熟年とも廃年とも思う日々
病んでみてから造花好きになり
ためろうてはおれぬ古木にも新芽
きよほうへん妻の心の中に寝る
親になり易く親には成り難く

俄遍路スケッチしたり拝んだり
子遍路の遅れ勝なる鈴の音
お遍路の一行に並ぶ大夕陽
月籠遍路日記もそこそこに
星廻り今年は数えで見えておこう

どの墓へも届けと春の鐘をつく
初耳の顔で終いまで聞いてやり
エスカレーターを歩く若さはまだ残り
真相が判って笑顔で引返し
此処だけの話にしとくと金がいり

かなしみの西より来れば西へ旅

近江砂人句碑(二二句)

句碑目指す八木山峠春深し
孔雀羽根広げおり句碑と澄みており
白秋は朱欒のごとし陽のごとし

川
村 好 郎

西
尾 榮

菊
沢 小松園

橘
高 薫 風

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

黒川 紫香

犬小屋も留守ですボカボカ陽気です

谷垣 史好

繋がれている筈の犬も一家の人々に連れられて何処かに出掛けたのであろう。待ち兼ねた春が来たと云う感じが出ていて世の中は平和だなあと思う。

ホールインワン働くことが嫌になり

小出 智子

馬券なり車券なり大穴を当てるとその人が駄目になってしまう例が多い。人間の脆さを見せつけられたようでお互いに心しなければならぬ事である。

パパは酒ママはその上煙草喫う

市場没食子

少年少女の非行が騒がれている昨今、こんな親達に不信を感じるのも無理はない。生活上の環境と云えばそれ迄だが、この句は親に警告を与えているものと思う。

七人の敵に女も交じっている

舟木与根一

女も交じっていると云う所に何か空恐ろしい気がする。愛か、欲か、銭金で済まないドラマが含まれていそうな句である。
カレンダー明日よ明日よと薄くなり

高橋 夕花

見かける事が少なくなった日めくりカレンダーだと思ふ。明日こそと心に期待をかけたが何も出来ぬ自分を責めている姿を、日毎に瘦せるカレンダーから見る事が出来る。
日本中同じテレビを見る怖さ

浦野 和子

ドキッとさせる句である。ニュースだと思ふが日本中の人がみんな同じ番組を見ていたとしたら、一体日本に何事が起つたのだろう昔浅間山荘事件というのがあつて日本中を震撼させた事柄があつた。
その日だけ書かぬ日記が抱く炎

八木 千代

いつ開いてもその一頁だけは空白である。その空白が燃えつきない炎となつて脳裏から離れない。情熱の一日だからこそ書くことが出来なかつたのだろう。

駅長の尺八を聞くローカル線

中村ゆきを

ローカル線の味わいがよく出ている。別に仕事を怠慢している訳でもなさそうで、たまにはこんなんびりした駅もあつていいのではないかと思う。旅人の心も和ませてくれる。

嬉しいことに米櫃の米が減る

福本 英子

主婦の喜びを率直に現わした句。大昔は口減らしを考えた時代もあつたが今は違う。外食ばかりして帰る夫、間食が過ぎて食事をしない子供達、悩みの多い主婦だけに米櫃の減りを素直に喜べるのだろう。

表札を一人増やして春になる

辻 文平

家族が一人増えて我が家の春を感じた句。上五を「表札に」とするとニュアンスが違って一枚の表札に家族の名を連記したものに、私は最近よくある一つの柱に家族の名を一枚ずつ書いて嵌め込んだと解釈する。
ポスト今日機嫌の悪い手紙抱く

小林由多香

いい手紙も悪い手紙も別け隔てなく呑み込むのがポストの使命である。投げ込まれた手紙の音を聞いてそう感じたのであろう。擬人法の句である。

妻に恋してお揃いのシャツを買う

森井 善居

妻に恋してという表現が面白い。優しい心が身に沁みてくるようだ。

虹の坂のぼれば消える定めかも

榎 みどり

女の持つ果敢ない夢かも知れない。この上にもない美しい虹だけに。

少し酔うて甘えてさよならを言う

山口 美穂

最近、美穂さんの句に甘いのが多い。淡い恋心を感じるのには私ひとりだろう。うか。

川柳 太平記 (37)

幕末開化期の模範川柳人

東野 大八

川柳も六世川柳（一八一三—一八八二）の世代が、政治も経済も文化も世相も最も悪くエキサイトした時代である。

六世が立机した安政五年に政治面では井伊直弼が大老となり、安政の大獄が断行され、桜田門外の変が起り、外国連合軍が下関砲台を攻撃し、幕府は長州征伐を断行。徳川慶喜が將軍となり、明治天皇が即位、鳥羽伏見の戦いのあと文明開化の世となり、自由民権運動が起り、西南の役」という慌しさである。こうした激動の政局を背景に、世相もそれに比例した。各地に百姓一揆が続発、ええじやないかの歌の流行。廢藩置県によるザンギり頭の流行。新聞・電信の登場。木戸孝九・

大久保利通の暗殺。そして板垣退助の自由党結成。国会開設といった風なさまざまな民情の一大改変、革新が相次いだのである。

五世川柳の時代にも大塩平八郎の乱、天保の改革、黒船浦賀に現れるなど、相当な荒れようであったが、この頃からしよ、うけつ、を極めた狂歌、狂文、落書、狂句、ちよぼくれの類は、エキサイトした世相風諷が、寸鉄人を刺し、その誹謗雑言やユ嘲笑ふりは、世人の大喝采をよびた。いわゆるざれ言風刺の一大潮流が逆巻いたものである。それは五世川柳の世に過熱し、六世川柳時代には狂歌・狂句に代表される飽くなきパロディの一大しよ、うけつ、時代を現出した。

こうした騒然たる世相を鎮圧すべく明治八年六月「ざんぼう律令」が公布された。

「凡そ事実の有無を論ぜず、人の榮譽を害すべき行事を摘発公布する者、それをざん毀とす。人の行事を挙るに非ずして、悪名を以て人に加え、公布する者、之を誹謗とす。著作文書若くは画面肖像を用い展覧し、若くは発売し、若くは貼示して人をざん毀し、若くは誹謗する者は、下の条別に從て蔽罰す」

それを総論に禁令八条を付し最高禁獄三月以上三年以下、罰金五十円以上千円以下などの量刑を定めた。これに付随して新聞条令・集會条例の弾圧が徹底的に施行され、多数の記者や民権運動家が投獄され、新聞雑誌の筆禍は明治十三年末までに三百四十九件にも達した。幕末の落首ざん謗の風の終焉である。

しかしこの狂歌・落書の類の一大弾圧が、逆に出版物の諷刺の技巧を洗練させる結果を招いた。その代表が、明治十年（一八七七）三月創刊の週刊「困々珍聞」がそれである。毎号菊判14頁前後で、内容は茶説・雜報・狂詞・狂歌・川柳・俚諺で、さし絵には金屬凸版使用という珍らしい技法を用いた。バタクさいボンチ絵がふんだんに使われた。

—開化とは開けて化ける姿なり

—アーメンはそば屋で売ると下女思い

—読み書きをせよとの布告読めぬ文字

—二等親だけに油が余計減り

想うに今日の時事川柳のハシリは、幕末、明治期のこの種の狂句川柳がハシリだと筆者は断定したい。(時事川柳については後述の稿でふれる)

もつとも明治の苛酷なざんぼう律令の公布は、寛政の改革につづく天保の改革期には、幕府施政の悪い誹謗雑言やユ嘲笑の罪禍として、目明し岡っ引が巷間で手柄顔に活躍し浮世絵、狂歌、川柳、狂詞、狂文の取締りに当たっている。歌麿らの手鎖刑罰、葛重らの身代半減等もその好例だが、明治の律令施行に先だつ慶応四年四月には、落書の出版物と目された「諷歌新聞」がその第一号だった。編集者は幕臣井上文雄、草野御牧らで、数カ月投獄され、二人の内一人は獄死のうき目にあっている。その発刊の辞が揮っている。

「日本紀神武天皇の御巻に、能く諷歌倒語を以て妖気を掃蕩す。倒語の用ここに始めて起ると見えて、歌は花鳥風月に対して風詠するのみに非ず。世間を諷誅し、その邪正を弁

じ賢を進め悪をいさむるに長編の文章に勝り、よく人心を感ぜしむる道なる由。云々」

まるで時事川柳の定義つけの一端に似ている。慶応四年といえは江戸は東京と改称。

「上方のせいろく共がやってきて、東京(とんきよう)などと江戸をなしけり」

「上からは明治だなどというけれど、治明(おさまるめい)と下からは読む」もちろん「諷歌新聞」は一号で即廃刊となった。

「士農かのどろしうのうと工商の、いふ分別もつかぬ世の中」

幕府から表彰三度の五世川柳(水谷金蔵)の「柳法式法」は

「政事にかかわりたる儀、何事によらず句作撰致すまじきこと」

ほか八条は、世間の幕政へのざんぼうぶりに対する狂句界への戒告・自粛ぶりを如何なく物語っている。随つて五世は川柳狂句界を結果的には擁護保全した事になる。

六世は五世の長男だから、五世の右の条を墨守擁護したのであろうことはもよりのことであろう。その余徳で六世川柳は有栖川宮一品職仁親王に拝謁を賜り、有難いお言葉と宮直筆の短冊まで拝領している。

六世のあとを継いだ七世川柳は、五世川柳

の姪の婿で家業は煙草問屋で広島久七。雅号を風也坊雪舎といい、六世永眠とともに、その直後に立机した。その立机記念句会の句集には成島柳北が序文を書いている。

この七世は実直な人物だったとみえ、六世の一周忌を両国の万八で二昼夜にわたる大道善句会をひらき、また七世継承の大会会は初代川柳百年祭も営んだりして明治二十四年九月五日六十七歳で死去。亀戸の慈光寺に葬られた。

—戸締りを頼んで吾は先に寝る (辞世)



PRUSS

高級洋菓子・レストラン

堺市役所前

TEL (21) 2334

誹風柳多留廿六篇研究

(二丁)

鈴木 黄・石田晋一・南 得二
小野真孝・本多正範・石田成佳
大屋六郎・八木敬一・多田 光

故岡田 甫

23 ひんのよい腕づくですむ御祐筆

鈴木Ⅱ「御祐筆」は、殿様の傍に侍して、文を綴り、また物を書くことを司る書吏の称。もともと武士は武芸が表芸で幕府や大名にかかえられるものであるのに、御祐筆ともなると書の手すじのよさが表芸で召しかかえられる。それで「ひんのよい腕づく」と言っただけ。

馬卷ッおろかに書かぬ御祐筆

明二・松一

御祐筆人を遣ふも筆の先

五・20

八木Ⅱ礎稿のようなことと思ふ。祐筆には女祐筆もいた。

多田Ⅱこの句に関する限り男女いずれともとれる。しかし「腕づくで奉公をする御祐筆」

(一一一九一)となるとやはり男子であらう。漱石の「猫」の「二」に「天璋院様の御祐筆の妹のお嫁に行つた先のおっかさんの甥の娘なんだって」とあり、「天璋院」は十三代將軍家定の奥方なので、その祐筆はやはり女なのであらう。

岡田Ⅱ女の祐筆は奥方用、ここでは考える必要はない。

24 上品なおとり子の来る鐘供養

鈴木Ⅱ「鐘供養」は、謡曲「道成寺」の趣向で、紀州道成寺に於ける鯨鐘再建の時の供養のこと。その法会の処へ、同寺の鐘に怨みのある清姫の霊が白拍子となって来る。この鏡はかつて安珍という若い山伏がかくれ、邪淫が化した悪竜のためにとかされたものである。

「上品なおとり子」は、清姫の霊の白拍子である。

鐘供養ばんくるわせが老人来ル

一三・5

鐘供養踊子が来てらりにする

九・1

石田成Ⅱ贊、この句は、謡曲でなく歌舞伎の道成寺であらう。

多田Ⅱ石田成さんは「歌舞伎」かといっているが、古川柳では謡曲の方と考へたい。

岡田Ⅱ踊子姿が現れるのは芝居の方。謡曲の方には出て来ないと思つているが。

25 つかみ取りにハけいせいハいかぬ也

鈴木Ⅱはつきりしないが、多分紀国屋文左衛門の吉原での豪遊の様子を詠んだものと思ふ。南Ⅱ吉原の傾城が意気と張りを重んじ、見識

が高く、客前では小判であつても不浄とし、通貨には手も触れなかつたとの事です。首題句の「つかみ取り……いかぬ也」は、手に触れるのを厭つたという意味でしょう。文左衛門に限定するのは反対です。

本多^{上五}「つかみ取り」から、紀国屋文左衛門をよんだ句ともたれなくはないが、吉原の誇りである意気と張りをよみ、仙台高尾を暗示した句ではないか。

多田^二「いかぬ」は「行かぬ」ではなくて、「そうはいかない」の意味と思う。私は高尾など全く考えず、一般的に「傾城の張り」を考え、強欲なことをすれば金の「つかみ取り」はできるが、傾城にはいくら金を積んでもそう簡単に「つかみ取り」(あらあらしく自分のものとして)してしまう。——自分のいうことを聞かせる)にはいかないと取つていた。

岡田^二多田説に賛

26 箱根山桜ハ茄子の通ふる頃

鈴木^二岡田甫先生の『川柳東海道』上巻、「献上茄子」の項を参考にすれば、句意ははっきりする。御一読下さい。

これに記載されているように駿河産の茄子は美味しく、初茄子は江戸では珍しく飛脚便で將軍様に献上するものであろう。

茄子通る頃は八里の山ざくら 四五・11
箱根山越した茄子は馳走なり 三一・27

多田^二同。

岡田^二同。

27 ほだいじゆへあつまつて啼く衣蟬

鈴木^二はつきりしないが、これはこのままの風景詩。『本草綱目啓蒙』を参考にすると、コロモセミ形大にして、馬蠅の如く羽すきとおれり。秋末盛に鳴て自ら呼ぶ。などと記されている。

初秋の静かなお寺等の立木の多い所で、唯々蟬のなく声が、音楽的に聞える、という句意と思う。

石田晋^二ころもぜみはくませみの異名ともみんみんぜみの異名とも言ふ(日本国語大辞典)ころもぜみ大序のやうにうなり出シ 一六・3

菩提樹は釈迦の成道を得たところであり、蟬声(読経にたとえる、また袈裟)とともに仏教語の縁語仕立と見たい。

南^二石田晋説賛。

石塔へとかまつて啼く衣蟬 傍一・4

八木^二「衣蟬」の説明は、礎稿の『本草綱目啓蒙』でよいと思う。また、この本以外に解説は見当らない。

多田^二石田晋説賛。後期になるほど縁語仕立が多い。

岡田^二石田晋氏の引用句「大序のやうにうなり出し」とあるように、ヒゲラシでなく、衣蟬はミンミン蟬と思います。

28 生国の極楽者を佐久間置キ

鈴木^二「佐久間」は大日如来の化身と云うお竹の主人、佐久間勘解由。大伝馬町の豪家との由。

佐久間勘解由の家では知らぬとは言え、大日如来の化身であつた「お竹」を下女として使用していた、との句意。

仏に飯をたかせたは佐久間なり 一七・41

南^二奉公人請状には、生国が必須項目である筈。佐久間家の下女お竹が大日如来の化身であるとするならば、その請状に生国を極楽と書かれていたであろうかの穿ち。

本多^二南氏説賛。奉公人請状にて上五がいきる。

多田^二諸説に賛。

岡田^二「極楽者」の語感には、どうも「道楽者」を匂わしているような気もする。

水煙抄

正本水客選

誇張する何も持たない影法師

高知県 赤川 菊野

モチーフがたまる逢いたくなくなってくる

哀しみの足跡ばかり匂に残る

翔ぶチャンスねらって妻がブーツ買う

ワイン掌に何時か消さねばならぬ人

花束を受けて今日から姑となる

大阪府 津山 刀水

ユニークな友だち一人持て余す

平凡な母を愛した父である

ほんとうの涙で女が強くなる

すまないと言書いてある別離

さわやかな風を残してゆくみどり

今治市 矢野 佳雲

紅一点よっぼどきつい職とみえ

大きさを示すタバコの箱を置き

案内の尼僧合掌して申し

どう仕掛けしても急がぬカタツムリ

三日目はもう疲れてる遍路バス

葉桜へ訣れの舞いか花吹雪

みんな嘘そんな気がする四月馬鹿

舵とを探しあぐねて笛を吹く

仲人が大阪弁でよう喋り

大地春 菜の花畑花に酔い

姑のカドがとれたは年のせい

たこ焼でお花見チョイといけますよ

豊中市 満仲 きく子

死ぬときはみんな一人よ花吹雪
れんげ見つけた時のわたしの瞳は少女
生きていく知恵はネコでも持ってます

弘前市 田中叶

パチンコ屋裏から春の風を入れ
昼の月これから風呂に行く女
何思ったかそれっきり出てこない犬
代替わり老舗の前の販売機
久し振り貯金おろしに来た二人

米子市 野坂なみ

勢いに乗れば乗ったで欲を出し
端役らしい端役に芝居生かされる
一年生 母の理想図詰め込まれ
何となく娘と嫁比べ姑の性
趣味育て老いの心に紅を刷く

西宮市 妹尾春江

不意の客閑人らしくよく喋り
他人顔してもめ事の外に居る
夕焼けをゆったり眺める日の快感
新しい出会いの人とみる桜
見失った逃げ道 他人があけてくれ

鳥取市 森田熊生

風せんの手からはなれた日の不安
泣くだけは泣いて青春また食べる
僕ひとりよりのこされた夜の音

とりあえずうなずいておくい話

寝屋川市 稲葉好子

待つことに慣れて女のしたたかさ

そばにいてコーヒーを飲み終るまで

早朝マラソン横雲追ってくる

想像の極限に自分を置いてみて

高槻市 竹内花代子

水盤でひねくれている葱坊主

梅見頃 梅の匂いの中の寺

暇のある手が内職へ寄って来る

貯め込んだ女おとこを近付けず
大阪市 橋元美恵

寝てる背に大きな愛を確かめた

文机に座る貴方の背が好き

盗まれた心誰にも打ち明けず

水仙の匂いの中でこのままで
京都市 松川芳子

燃えつきるように老木咲きほこる

愚痴語り合うて姉妹のレクレーション

花吹雪そんな絵になる風が吹く

冬枯れの鉢へ母娘の水談議

美しい直線だった父の思慕
岐阜市 市川鱈魚

大悟まだまだ亀の首見とる妻

泥舟と承知 男の日々はある

真つ白な皿に気を張る冬いちご

島根県 東原 福子

池の水 花びら溜めて春が逝く

噴水の崩れるしぶき野は炎える

わびしさを束ねて春の白い髪

孫達へ明治 正座を崩さずに

尼崎市 奥山 美智子

幸せはタイヤにはない菜指

故郷の母を思うと強くなる

柔らかい絹に溺れていく女

淋しくて波紋をつくる水たまり

西条市 片上 明水

嘘ひとつ許してもらう花の頃

書くことが春の日記は多すぎて

引き潮の波にも乗れぬ不器用で

メモ帳をポケットに持って職が無し

堺市 田辺 哲寿

電卓の答え算盤で確かめる

目をそらす女に愛は消えている

会う人に合わせた仮面付けて行く

大声を出して治める腹の虫

羽曳野市 麻野 幽玄

やけ酒を覚え小心者になり

云いたい事云うがするべき事はする

点滴の滴りと睨めっこして個室

車椅子降りて素足で踏む芝生

大阪市 村上 田鶴子

春の街 春を纏うたひとが行く

夜桜を去年と同じ顔で観る

何事も愚かに見える日のレモン

桜餅 亡母が笑っているような

島根県 堀江 百代

いつか又お会いしましょう別れぎわ

又ひとつ利口になったお茶の友

日曜はごろり寝ころぶ事にする

灰皿の代りに火鉢よろこばれ

岸和田市 福島 せつ子

表情がどこから見ても綺麗な娘

まだお独りですかと人はもう聞かず

スケッチの表紙に春の匂い描く

いたるところに自作画かけて心満つ

名古屋市 鈴木 可香

相手の顔しっかりとみて聞き上手

娘を連れて春の婚礼家具売場

嫁の里黄金にみかん実る島

玄関の客へ灰皿持つてくる

大洲市 米沢 暁明

旅先の句帳よめない走り書

母ちゃんが元氣わが家の福の神

銭湯でよう瘦せたのは隅にいる

税務署の見込みの方が得のよう

鳥根県

松本文子

むかしの川へ流れていこう紙人形

競い咲く花に満足だけがあり

傷心を忘れる旅の夫婦箸

ワンナップ男無心に封を切る

大阪市

大野武太

妻と来て清涼殿の雨に佇つ

年下が年金を口にする寒さ

自惚れがあるから長生きできそう

故障車のうしろのんびり特急車

米子市

田中亜弥

とりどりの色につつまれ墓も春

故郷が舞台で推理すぐにとけ

苦労性 風の音にも身構える

鈴の音を確かめあって喜寿迎え

岡山市

原田凡太郎

芽の出ない父の自慢は母でした

巣を作る雀見ている妻の留守

リハビリへ春よ来い来い早く来い

春の猫鳴くだけ鳴いて遠ざかり

鳥取県

加藤茶人

敗者にも言い分がある日記閉す

退院も間近か口数ふえてくる

見栄少し捨てての姉の所帯ずれ

児には児の思惑があり歩を早め

大阪市

稲本凡子

夏やせの子定狂わす冷夏なり

祖母に似たしぐさを娘笑いあい

親と娘の幸せ違うまま嫁ぎ

ゴムの葉をていねいに拭く風邪の昼

唐津市

田口虹汀

羊羹に煎茶が美味い散る桜

煙るように降るから春の雨が好き

音立てて降る春雨が憎うなり

母の腰かるく押し押し花の山

新宮市

辻はじむ

隣室は孫の見舞いがあるらしい

窓の外みんな無病の人ばかり

中天の月が見おろす那智の滝

米子市

政岡日枝子

酔っている声で商敵さぐり入れ

目の位置でおみくじ結ぶ老夫婦

亡母の植えた花が絶えている実家

新潟県

高野不二

酒酌みかわした別れに悔はなし

冗談だから落第だぞと子に云える

待ってますと書いて伝言板も春

名古屋市

越村枯梢

淡雪の囁き春へのラブコール

実印の重さよ父祖の山を売る
ラーメンのつゆが残って倦怠期

高知県 山下登舟

平凡に生きて夫婦の喜寿と古稀
一人碁もあきつれづれを花の道
花近しぼんばり立てる穴を掘る

高知県 松岡三吉

卒業のこれから金のいる娘
再婚の話へころぶ毛糸玉
新聞に朝の素顔を覗かれる

大阪市 堀口欣一

通り抜け向いも花の泉布観
糟糠の妻の白髪的美しさ
バス停で経本を読む若い僧

旭川市 朝倉大柏

汚職など出来そうもない椅子で終え
その裏を知らぬ善人むきになり
関心がほしくて少し非行する

兵庫県 森脇和子

自転車が二台並んで話好き
婦省の子父とよく似た靴の音
文通の友より届く花便り

大阪市 鍛原千里

健康器 三日ぼうずが隅に置き
故里の山の深さにすくわれる

卒業式かわいい恋もさようなら

島根県 松本はるみ

土堀朽ち妖しきまでに葛からむ
古里になつかしきもの蔵一つ
氷雨降る冬の女神のすすり泣き

交野市 山本テルミ

節約をさせてなるかとコマージュル
健康にお金いらぬ散歩道
雨の日の和服へ久し振りの下駄

尾鷲市 渡辺伊津志

波光る方へ傾く梅の里
背景の松山は昏く梅が咲き
愚痴はもうここで打切る紅を引く

今治市 渡辺南奉

反論も正論はたと膝を打ち
家中の灯を全部つけ父を待ち
相槌を打つと渦中にまき込まれ

大阪市 杉本智慧子

母水眠

祈るとき母の慈愛が五指に満ち
夜のしじまに亡母の声あり耳澄ます
水仙を切れればあふれる水の色

鳥取県 武田照子

麦飯が現代っ子の口に合い
引き金に成った言葉は伏せて置く

きまじめに生きて漢方煎じてる

松原市

佐藤藤子

着せたくてやはり娘の服をかう

お洒落着に国防色があり平和

苦手なこと苦手と言つてらくになる

高知県

山崎広風

国鉄に切り捨てられて足がない

キーの鈴妻も鳴らして朝が出る

翔ぶ努力せずに鶏砂を浴び

羽曳野市

佐野白水

拝観料取らない寺で物足りず

君よりも先に句集で再会す

与呂志さんと再会して
十三年振りの川柳塔

あの人もこの人も健在なり川柳塔

今治市

新居田 胡頼子

嘘ひとつ心の動きみすかされ

この俺をさらって欲しい花嵐

ローカル線 抜け歯のように無人駅

米子市

青戸美佐

十字架の明るさ外人墓地めぐる

反抗の背に幼なさのまだ残り

生涯を端役それなりの幸もあり

兵庫県

田増貞子

夕立のなか走る兎に母の声

熱下がりいつもの寢息の夫となる
客布団陽に干し友の来るを待つ

三原市

戸田 富久子

耐えてきたここが限度と湯がたぎる

酔さめて昨日と変らぬ今日と知る

気まぐれな風が私を翔ばせない

大阪市

吐田 公一

手をつなぎカバンが歩いて来る四月

ビル暮れてはき出る中の一人ぼち

傘寿なお即興詩人の気概持ち

尼崎市

中谷 利美

いつまでも女無色で居てられず

お婆さんと呼ばれてからを出たがらず

幕の内好きなものから箸をつけ

東大阪市

藤川 誠一

厚着するから肩がこつてくる

ため息をさそう見事な紙一重

寒がりにまだまだ遠い夏である

大和高田市

岸本 豊平次

怒つてもくれない母の老いすぎで

孫が手を引っぱり夜店つきつきと

神様も吹き出しそんな願いごと

倉吉市

今村 夕路

九回の裏の逆転期待せぬ
ローン終え家に明るい灯がともる

公園の桜みどりに衣替え

鳥取市 武田帆雀

スリッパが片足履けぬ胸読まれ

チャンネルを回すと動く寝た眉毛

花柄のバスタオル巻きまだ老いぬ

鳥根県 岩田三和

目に見えぬところに手間をかけた賞

歩いたら遠い車は近すぎる

木を植えてうまい空気を子に贈る

大阪市 斉藤きくみ

雨もりはバケツの底に念を押し

節約か割箸さえもつけてこず

音もなく屋根が濡れてる春の雨

米子市 雑賀美世

飯盒が平和の棚で忘れられ

意に添わぬ父のレールに乗せられる

伏線の端役にドラマ盛り上り

今治市 八塚三五島

悪筆も記念となれば生きてくる

三十年たてば師弟が共に老け

十人に満たぬ朝礼だが社長

鳥根県 藤原鈴江

弟の大風呂敷も聞いてやる

生きている人形もあり菊の花

野の花でわが家の床を春にする

大阪市 山田松太朗

この雨で春一番の花便り

にわか雨 駅に集る花見客

陶匠の夢は冷たい艶と色

大阪市 平井露芳

囀りに飽いたか ひばり巢へ戻り

いい会社ばかりが競うパピリオン

雨降れば降ったで又来るポートピア

岸和田市 雪本二三子

洋ランの蕾と毎日にらめっこ

内裏さま孫の帰りを待っている

慶びが重なり心ひきしめる

鳥根県 星野侑正

停電が夫婦喧嘩の腰を折り

Gパンをはいて女も酔う構え

許されたデートへ春の月おぼろ

松原市 本多洋子

人だかり覗いて見たい春の風

新芽摘む爪に緑の血がにじむ

髪型を変えて春風に乗ってみる

唐津市 桑原掬治

浜辺の鶴 忘れたところに首を出す

川底の石にも安らぐ土がある

尾道市 八木秀水

久し振りお灸すえれば亡母恋し

亡母の声に似てる妹へ電話する

兵庫県 奥野テル

寝屋川市 立床晴風

清廉な夫で時計の様に生き

目鼻立ちきれいで根性は別に持ち

西宮市 山田喜代子

掘り出すとそら恐ろしい不発弾
暴言も失言も吐く成り上がり

兵庫県 山崎忠夫

飼犬にも少し広い家が欲し
妻と嫁の笑い声する台所

水仙の香り残して見舞客
一合は一合なりにすぐ醒める

熊本県 有働芳仙

肩たたき頼んだ孫は男の子
デパートへ遊びにやった雛祭り

唐津市 仁部四郎

抜け穴が塞いであつて首を吊り
ベッドから手鏡で汲む空の青

鳥取県 和井観洋

散る花を励ますごとく風が吹く
小さな溝にも春が来て動く

山口県 高崎喜一

七転び八転び やる気のない達磨
カラカラと五月の風の嘘を聞く

唐津市 山下勝一

生きている声 丸いの尖つたの
人生の一コマなどと慰める

八戸市 島田昭治

憲法論議 総理二つの顔を見せ

レーガンにヨッシャヨッシャも云うとれず

大阪市 白石潔

旧友と電話楽しむ夫の留守
郵便も素通りをする老いの家

大阪市 岡田ふみ

子の肩にかからぬ余生思案する

和歌山県 天満三千代

囑託の方は振らない赤い旗
囑託がぼつり全員会議中

橿原市 西本保夫

逢うまでを自問自答で待っている
平凡に暮れて安眠うたがわず

唐津市 木塚素石

薬師寺は写経の善意で塔が建ち
亡き夫の写真結構若いまま

岸和田市 吉水照江

つっぱってかっこうつける高校生
道具屋で育ちの良さを役に立て

唐津市 木塚素石

高槻市 田崎あき子

職人の年期が妥協許さない
深水の美女立たせたい春の雨

兵庫県 山根 左 春

朝方の小鳥の声も高くなり
布団しく今日一日を感謝して

浜田市 佐々木 裕

五分五分の嘘持ち合うて夫婦和し
春の蝶忽然と来てのぞき居り

泉佐野市 大工 静 子

久し振り肝心のことに触れて来ず
端切れふとフトンの中へ縫い込んだ

和歌山市 坂 部 紀 久 子

インタビュー先ず相手チーム誉めてから
耳だけをアンテナにして猫眠る

兵庫県 野々口 ゆう也

野良猫に徹夜の帰り叱られる
沈んでる作句を叱る手ずれ辞書

青森県 波 ただお

あの星のどれかに亡母の霊がいる
朗らかな電話へ心が澄んでくる

鳥取県 羽津川 公 乃

大安の誤算ストまで気が付かず
ささやかな贅沢 祖母の抹茶好き

大阪府 林 ひろ子

一枝の花器の桜に迷い蜂

巣立ちさせ夫婦の膳に箸つかず

岸和田市 藪 野 けい子

入学へふたごが目立つランドセル
夜ざくらへ鉄板焼の匂いする

唐津市 浜 本 義 美

雪害の杉山天へ牙をむき
六十路まだ口笛吹いて出る若さ

岡山市 池 田 半 仙

子育てに今日も健気な糸切歯
見馴れてる窓寛げる旅帰り

米子市 菅 井 未 知

その勇氣ほしいヤングに気が疲れ
名物の試食小さく切つてあり

奈良県 宮 川 古 都 路

塔夫婦 寺門を空から寝ずの番
橋筋の春めく色へブーツぬぐ

東子市 小 山 悠 泉

所作もなく無風をなげく風車
法被着て日本人は祭好き

唐津市 浜 本 久 仁 於

一茶には済まぬ雀の炉端焼
童心を孫に合せて砂遊び

岡山市 串 田 句 味 地

清貧に甘んじ運に放つとかれ
届かない宙へ風船点となり

ポーランド ソ聯が創る予告編
花見料理家であつた憎い雨

松江市 豊田 巡歩

東大阪市 三宅 哲夫

結局は昔に帰るらし漢字
何はさて置いてまるく歩きましょ

大阪市 野田 君枝

インタビュー勝った監督よく話し
ポートピア六甲山の草が生え

愛知県 国分 甲子郎

三杯酢サワーでヤング舌に合う
ハンドルを持つと勝気な娘の啖呵

大阪市 岩田 八文銭

七十四これから先は儲けたよう
親切にされて泣きたい思いする

奈良県 大寛 直木

酒呑めば気弱な河童踊りだす
孫いらぬ世間にさからうやせ蛙

兵庫県 藤原 捷一

受話器置く音で少々気もめる
カレンダーをめくりながらの長電話

大阪市 西村 芙佐女

女一人歩く細道みつけどく

島根県 福岡 芳枝

關病へ關病の本借りにくる

今朝も又しよぼ降る雨に起される
大阪府 越田 寿幸

さよならと書く春宵のラブレター
大阪市 藤森 小雅子

入寮の息子に持たす風邪薬
尼崎市 中辻 千子

連日に止むを知らない雨に酔う
東大阪市 坂本 喜洸

ペンネーム本名よりも親しまれ
倉吉市 田民 碧水

退院の日の薄化粧女なり
河内長野市 糸谷 春草

雨宿り老いの憩いの一頁
大阪市 山本 炬齊

菓子折りを受けて縁談走り出し
米子市 寺沢 みど里

節約し他人に迷惑かけてません
大阪市 村島 秀村

山の峰 雑木林が人に見え
奈良県 近藤 松枝

セーターの下にまぶしいもの二つ
大阪市 大萬 豊

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 56年1月号
至 56年4月号

◇路郎賞候補作品

(到着順)

正本水客

木曾路にもモンマルトルにも石畳

羽原 静歩

岩田 美代

法善寺女は疲れ切っている
残り茶のごとく味濃き古稀と言う

仲どんたく

風のように花のようには生きがたし

高橋 夕花

筆不精書きははじめると長くなり

堀江 芳子

冬の蚊よ俺も逃げ場のない書齋

谷垣 史好

伝説の鐘の余韻に霧しずむ
アクセサリー皆んなはずせと云う手術

佐伯 越子
藤後 実男

雪の袈裟払って野仏の眼に出逢う

錦織 文子

順々に嫁くそれだけを羨まれ

大矢 十郎

あやまちのここまで過去として捨てる

西村 早苗

朝の海キラキラ娘がしゃべるよう

越智 一水

どの星も私を見てる歩まねば

神夏磯道子

お遍路へ鐘がおまけのよまに鳴る

藤井 明朗

家事に追われて幸せそうな女

宮尾あいき

命日の菊の白さに亡母をおく

中川 滋雀

元旦の心四恩をかみしめる

工藤 甲吉

父の齢こえて寂しい春の酒

高杉 鬼遊

泥沼で寄り添って咲く花もある

林野 甞光

信念を貫く鱈魚の道はるか

嘉数千代香

手探りで行く人生に味があり

奥谷 弘朗

おだやかな言葉に苦勞耐えた味

山本規不風

地下足袋の聲し奇跡を望まない

鈴木村颯子

心音に触れる訓えは懐に

野村太茂津

足るを知るものにはほのほの陽が昇る

水粉 千翁

数珠を持つ心に貧しきなど見えす

錦織 文子

合掌の出来る両手へ感謝する

細呂木魯木

ポケットベル草の根わけけるように鳴る

小西 雄々

音消して反省多き日記書く

小林由多香

社長室いやな自分になっている

田垣 方大

繫がれた犬を野良犬見て通り

川口 弘生

川村好郎

捨て石となるよろこびを子に告げず

八木 千代
これ以上追うと喉がすすり泣く
大道美乙女
明日よりは遠くは見ないことにする

小島 蘭幸

夫婦箸塗りが剥けてきたまるさ
幸運も必死になって俺を追
一人来た訳を知ってる里の母
大野 酔夢

江口 度

水族館の魚ほどには悟れない
札束に善意と悪意見すかされ
生命ありこんな嬉しいことに遇う

小出 智子
本多 柳志

白い旗負けず嫌いが持っている
弱肉強食それでも独りにはなれず

本間満津子
小幡 里風

大根の白さを誰も疑わず
鉄瓶のたぎるリズムに和を見付け

福本 英子
高橋 夕花

横糸を信じて二人の夢を積む
裁かれて裁く世相の二重底

佐伯 越子
山内 静水

菊 沢 小松園

逆わぬ妻になったを淋しがり
男ひとりちりめんじゃこで飯を食う

山本規不風
谷垣 史好

「歩調トレ」と云いたいようなブーツ来る

松川 杜的

孫が捨て姑が拾って揉めている
爆発させた自分がピエロめく
黙殺という手もあった言わせとけ

林 露杖

造花では豆になるまい藤の花
何もかも見たので仮面外せない
色眼鏡かけて自分を見失う
殴ってもなぐられても先生叱られる

内芝としよ
国弘半休門

肩書がついて握手が好きになり
ゴキブリも危機一髪は翔んで見せ
難民の飢えを知らないコシヒカリ

遠山 可住
黒川 紫香

西 尾 栞

元日やああ振り向いてなるものか
水に流せば負ける事になる
蛇の目傘干して近所と交わらず
本心を知りたし少しおこらせる
志望校きめかね膳のゴマをとる

岩本雀踊子
森下 愛論

高橋千房子
香川 酔々

「歩調トレ」と言いたいようなブーツ来る

除夜の鐘ローンローンと響くなり

松川 杜的

河原みのる

正確な時計が嫌になる若さ
繋がれた犬を野良犬見て通り
社長室いやな自分になってる
沈丁花二月の風を抜けた露路

小島 蘭幸
川口 弘生

泣き虫を四五人囲む一年生
白虎隊の年頃なりき師を殴り
箒もつ青年もいる建国祭
捨て猫が又増えるらし臘月

橘 高 薫 風

老兵の思い出ちぎれ雲に似て
枕木の悲鳴を聞いたことがなし
本心を知りたし少しおこらせる
妻や子に見せぬやさしさ菊手入
病院の先生孫と同年

藤田軒太楼
森井 善居

もつ何もない人と逢うにぎりずし

高橋千房子
辻 文平

宮尾あいき

どの弟子も師匠の悪い癖を持ち
立志伝嘘のところが面白い
定年と知らず張切る犬を連れ
きさらぎの海のやさしさ不安なり

遠山 可住

達磨眼を貫い神通力消える
時の止まった一幅の絵に猫殺てる

川村 好郎
若柳 潮花

平田 実男
遠山 可住

八木 千代
小島 蘭幸

風邪もよい竹久夢二の顔でいる 西出 楓楽
真似するなするなと滝の水が落ち

演壇のポーズで被告席へつき 菊沢小松園
正本 水客

◇川柳塔賞候補作品

黒川紫香

こまくるりくるり子どもの日にもどる

種火まで消して女は去って行く 森田 熊生
袋小路と知らず選んだ道を行く 豊田 巡歩

某月某日食卓のまるい罌 桑原 伊都
食べている時の幸せそつな顔 高杉 千歩
和の中に生きて夕日のすばらしさ 満仲きく子

電池切れるまで時計休めない 天満三千代
しじみ汁今日一日の夢がある 平井 露芳
微風でも直ぐ歌い出す風車 竹内花代子
雪しんしん便り書こうか詩書こか 有働 芳仙

谷垣史好

逃げ過ぎて風が変ったとも知らず

矢野 佳雲

花一輪妻のすべてが生けてある 山本 桐下
種火まで消して女は去って行く 豊田 巡歩
袋小路と知らず選んだ道を行く 桑原 伊都
父逝って酒屋のつけがもう来ない 辻 はじむ

霊柩車油入れている月夜かな 田中 叶
この耳があるばかりに腹が立ち

ひとり居て一人だけなるわたぼこり 原田凡太郎
一夜明け夫婦ボタンを掛け直す 武田 照子
じやがいものどれもかわゆく見える日よ 佐々木 裕

光はもう春のものです針供養 満仲きく子
神様がきざんでくれた顔のしわ 岩佐 富子
もつあとのない日の靴も光らせる

香川酔々

正月の鯛一切れがまだ残り 朝倉 大柏
川の字の真中猫が寝ています 高杉 千歩
遠くなる故郷それでも墓がある 橋元 美恵
僕が幕引くと喜劇になっている 越村 桔梢

天皇の瞳に拾われた野辺の花 矢野 佳雲
河内野を嫌った凧は糸を切り 有働 芳仙
さあどうだどうだとチラシの字が赤い 堀内 柳柚

高杉鬼遊

又人を信じた貝が蓋を開け 武田 帆雀
ひとり居て一人だけなるわたぼこり

流入墓年ふるごとに石となる 武田 照子
文学に燃えた背中に子を背負い 政岡日枝子
この指に止まらぬ奴が一人いる 寺沢みど里

人がみな偉く見える日父の墓 田中 叶
老妻は自動ドアの閉る距離 桑原 掬治
敵へ廻った駒が王手と攻めて来る 島田 昭治

専門に診せろと初診料は取り 麻野 幽女
ただ青くありたいばかり冬の草 岩淵 一星
花嫁の父です箸をまだ付けず 東原 福子
会社保つやろかローンの終るまで 加藤 茶人

父逝って酒屋のつけがもう来ない 中谷 利美
コンピューター我が社の秘密みな覚え 辻 はじむ
押しのけてゆかねば俺が負けとなる 内藤ますえ

山下 勝一

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

八木千代

腕時計はずすが、ごとき別れなり

村上田鶴子

淡々と詠んではありますが、別れる理由も
思い当らぬままに、どうしてか巧く別れられ
てしまった、そんな女の心が届いてくるよう
な気がしてきます。

百年もたてばどうって事はない

大野 武太

百年もたたなければ薄れることのない大き
なショックを、あんまり気楽そうに言い捨て
てあるから、なお「どうって事はない」が底
深く、涙を溜めた詠嘆と響きます。

一対一 妻にもあつた愛讀書

高杉 千歩

「上五」の「一対一」という確かな主張が
すばらしく新鮮です。妻でいて、人間へ深ま
って行く姿に驚いている、あたたかて正直な
眼が浮彫になって、さわやかな感動を呼んで
くれました。

より処そこにも白は白でなく

中森葉士人

外側に向けられた怒りではありません。最
後の信頼さえも捨てねばならなかった、自分
自身への、怒りと悲しみが迫ってきます。澄
んでいて、こわくなるよ様な感情のかたまり
がぶつつけてあります。

悲観から何も生れぬから笑う

加藤 茶人

ここにも、大きな達観があります。つきつ
めて下降した底からの笑い。今度生れるもの
は、きつと、ほんものばかりでしょう。

音のない恐さ一人になってから

麻野 幽玄

極限に淋しさが達したとき、一番欲しいの
は、音であろう。そう思います。音は命の証
しでしょう。私も、思い当ることがありまし
た。

恍惚へもう雑音も来てくれず

雑賀 美世

「来てくれず」に思いがこもっています。
美世さんには、御老父を憶ばれる句が沢山あ
つて、それぞれにいい味があります。

何故の旅か小さな渡り鳥

松本 文子

旅。渡り鳥。と安易に詠いたくなる題材な
がら、「何故？」と、心の視線を投げかけれ
ば、その瞬間から物語がきこえてきます。

ローカル線消えて都会も遠くなる

今村 夕路

そして過疎はなお過疎に。かけ橋をひとつ

ずつ、はずされて行くかなしみは、都会イコ
ール青春の挽歌になって行くことでしょう。
道問うたひとにまた逢う旅のこと

浜本久仁於

よくある旅のひとつ。この微笑ましい
ふれ合い、絡み合う視線の面白さ、旅らしい
旅の一句を頂きました。

選り好み出来ない蝶に花は耐え

山崎 広風

花の心の機微にふれた発見です。花にも、
花権というものがありません。どんな涙
で耐えるのでしょうか。花の私語がききた
くなってきました。

内輪ではすまない声になって来る

津山 刀水

腹さぐり合つて酔えないまま戻り

森田 熊生

抑えきれぬ激しさと、胸の中で発酵するよ
うな感情の疲労。それぞれ、やり場のない流
れが、チャンと自省を伴っています。男性
の句だなあと感心してしまいます。

肩車ほうら夕焼けきれいだね

吉田比呂子

踏まれてもかまいませんと草芽吹く

原田凡太郎

「ほうら、ほうら」と見上げる夕焼けの天
そして足もとには、踏まれても悔いなどない
と、けなげに春の歓喜をうたい上げている
草の小さな芽。この自然と対峙する、みずみ
ずしい肉眼のうれしさ。川柳は、さまざまの
愛を受けさせてくれます。

生命の一頁

乃 菫 生 麻

「神光あれと言いたまひければ光ありき、神これを善しとみたまえり」これは旧約聖書の創世記第一章にあることばである。

光は天地創造のはじめにあった。人の生命の第一頁は驚きの精神ではじまっている。驚きとは、そもそも何であったか、それは心に受ける衝動である。光は何よりも先きに人間の瞳を刺戟した。これ第一の衝動である。そして、次々と身近かに迫って来る、物体のひとつ、ひとつは新しい驚きとなって、瞳に映っては消え、消えては映り、その驚きは際限もなく続いて来たのである。この驚きの精神は詩情を燃やす火だねともなり、韻律をそなえた発言ともなって現われるのである。

短詩型文学愛好者は片時もこの精神から離れてはならない。だが、人間は物に馴れ易い性癖を持っているので、大切にせねばならぬ驚きの精神も、いつとはなしに免疫性となり、遂に忘却されて終うのである。

この危機を救うために、私達の「川柳塔」は驚きの精神礎石として建立され、未来永劫に、その壮麗美麗な姿を誇りとするのであろうと思っている。

葎乃先生を想う

●板尾岳人

風さらと芒のむしをだまらせた 葎乃
この句を僕の家の玄関の右側に短冊入れの額に入れて、先生のいきいきした心が快い手ごたえとして感じさせ、御存命でいらっしやる気持で接して、先生の温もりを感じている。この句の素朴な味わいは、いつまでも燃焼させながら、どうしようもない真理として胸に迫ってくるのだ。そうすることによって僕はつつましい喜びに浸っている。

飾り気のない人柄と、半面近寄り難き礼儀正しさを備えた人で、また僕にうしろからそっとコートを着せてくれるような人だった。

登山好きで、あなた様のことですから、ひ

よつとしたら、お留守かも知れないと思っ
ていました。

一歩 一歩 一歩 一万二千尺

あなたを思う時、私はいつもこの句を思い
出します。どなたのお作か忘れましたが、よ
い句だと思えます。一体山の風景の一番よい
時はいつなんでしょう。春・夏・秋・冬と四



ありし日の葎乃先生

季を通じて一番見どころのすぐれた季節は、
いつごろなんでしょう。勿論どの季節でも、
それぞれ、ちがった見どころがあるでしょう
が、あなたの御感想をおきかせ下さい。承り
ましても、おいそれと出馳けられる身ではあ
りませんが、老体の身のせめてものたのしみ
に聞かせて頂こうと意を出したとこです。

お序のとき、おひまな時におねがいたし
ます。永いあいだ寝て暮していましたから、
いまだに歩行困難です。ぼつぼつ歩く稽古を
室内でしています。

私のすきな歌一句

山に問う 山はこたえず 山に入り

山の心をいまだ さとらす

某月某日 麻生 葎乃

板尾岳人様

この書簡を頂いてから、何度も出しては読
み、感覚と感性に火をつけ、そして私は飛び
上がって回想するのです。それが僕にはつつ
ましい喜びなのだ。

わが川柳の母、葎乃先生の慈愛あふれる経
験と観察想像力は、僕にとつて青春の夢想と
愛の主張なのだ。先生の計を薫風先生より聞
いた時、ぐさりとする感懐をとまなつて耳に
届いた。先生これからも彼岸から清新な刺激
をお与え下さい。ねばり強く、情熱にとらえ
られた川柳家として生きて行きます。無駄と
云う余裕をどんどん広げて、向上心を常に忘
れぬ岳人に。

先生、さようなら。
すべては終つた。

てんでんばらばらに春を吸うて来る

島根県

大野 酔夢

能面の裏は見えない芸の道

竹原市

大島 紫光

まつば蟹食いのこしたり海一つ

岡山市

川端 柳子

亡母想う時むらさき色の雲

堺市

田辺 哲寿

傷口をその一言で大きくし

寝屋川市

柴田 英王子

ストレスが薄れる程は和ダンスに

大阪市

杉本 智慧子

落花しきり悲しみ深い淵となる

藤井寺市

児島 与呂志

知らん顔しながら親父として案じ

青森県

五十嵐 操史

勢いのおもむくままに我を通ず

米子市

岡 日枝子

墓で又出逢う妻だといとおしむ

大阪市

江城 修史

花冷えに女の胸の豊かさよ

米子市

菅井 未知

徹してる端役ライトも気にならず

島根県

福岡 芳枝

人間の丸味を柔と剛で画く

米子市

田中 亜弥

薄れ行く意識にも髭伸びつづけ

岡山市

嘉数 兆代賀

独楽ちびて余白を埋める彩で舞う

大阪市

川口 弘生

ペンネームが踊らされてる文士劇

人形を背負いかけたら次ぎ生れ

桜井市

谷口 梨郷

一生の不覚と言えば言い返し

宝塚市

吉田 笑女

宮参りおぼあちやんが若すぎる

柏原市

志野 匡俊

春斗に燕ひたすら巣を作る

松江市

豊田 巡歩

みなみ東風蔵のこぶしわが世顔

岡山市

串田 句味地

遊歩道こころ豊かな人に会う

島根県

小砂 白汀

訃報来る無風の中を落ち椿

和歌山市

若宮 武雄

悔いのない指節くれたっている

島根県

堀江 正朗

耳鳴りは特急電車に似た響き

島根県

堀江 芳子

花吹雪追っかける孫追う花弁

京都市

山本 規不風

説明の出来ない愛の星の女

東海市

小山 悠泉

ていねいな白バイ許してはくれず

鳥取市

武田 帆雀

鍵を持つ男うろろして困り

八戸市

小泉 紫峰

風化した話先輩得意顔

倉敷市

藤井 春日

出勤をするかのように医者通い

大阪府

坂口 公子

蜂の乱舞サキソホンどころでありません

平田市

久家 代仕男

まだ生きて居ますへ沈丁花が匂う

吹田市

西川 景子

五湖巡り表情豊かに春の富士

鳥取県

鈴木 村諷子

人間に戻してくれた母の海

浜田市

中川 幸一

好き嫌いしても高気圧低気圧

松江市

舟木 与根一

演技など必要なくなり夫婦老い

名古屋市

越村 枯梢

泣きながら踏絵を踏んだ負け戦

松山市

谷 真風

仏壇の櫛に花が咲き彼岸

倉敷市

小幡 里風

どう見ても手心がある四捨五入

唐津市

岩崎 実

商魂の数字あしらう値段表

唐津市

浜本 久仁於

春一番過ぎて闘う春となり

鳥取県

清水 一保

草燃えていざと大地も見構える

島根県

木村 はじめ

栄転も左遷も同じ春の風

大阪府

吐田 公一

銀婚に出逢いの縁をまた偲び

岡山市

原田 凡太郎

丹前で餅を焼いてる父が好き

唐津市

木塚 素石

竹落葉筥いだきねんころり

大阪府 西森 花村

和歌山県 福本 英子

島根県 榎 みどり

天理市 出口 恵美子

豊中市 満 仲きく子

高槻市 田崎 あき子

大阪府 朝倉 利義

大阪府 大野 武太

浜田市 佐々木 裕

唐津市 桑原 掬治

倉敷市 齋藤 通風

米子市 青戸 美佐

大阪府 市場 没食子

愛知県 国分 甲子郎

奈良市 森田 カズエ

唐津市 新岡 回天子

中曾根も河本もなしどうなる世

唐津市 仁部 四郎

宮尾 あいき

無罪よしただけ無法は頂だけぬ

鳥取市 両川 洋々

自作自演のドラマにみことな嘘がある

大阪府 神夏磯 道子

幾山河越えた言葉の艶が出る

岡山県 岩道 博友

失意の日辞表の真似を書いて見る

唐津市 浜本 義美

大根の値に干大根が不服

西宮市 妹尾 春江

空になった果箱に今日も花活ける

羽咋市 三宅 ろ亭

上座三つ空けて幹事の指示を待つ

岡山市 井上 柳五郎

句帖の白春日のうららか過ぎ

岸和田市 古野 ひで

人生の節目節目で女耐え

今治市 新居田 胡頼子

もひとりの自己が日記の隅に住み

三重県 坪田 冬花

又すぐに飽きます妻も子も笑い

大阪府 藤森 小雅子

校門の桜へ樹齡問う菓立ち

京都府 稲葉 好子

苦しみの胸にある句が生れない

今治市 八塚 三五島

子は誰か育ててほしい共稼ぎ

★ 豊中市中桜塚三丁目13-15

橋高薫風(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「顔」 選者 橋高 薫風

締切 6月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町6-4 NHK

大阪放送局 老後をたのしく係

発表 6月27日(土) ラジオ第一放送

午前9時15分から

柳界展望

(原稿締切毎月末)

■句集川柳長屋第19集が京都川柳長屋連から出版された。「義博前差配の念願だった十九集が発刊?」の雑文も出揃い漸く名刊?になりました。店子も多数転入しましたが、隠居連も本号中にはまだ活躍して居ります。……家主敬白「ちなみに新大家は、藤島茶六氏である。」

澄む／大森風来子・関水華 各題3句・句箋に一句一枚無記名・発送用封筒に、住所・出句者名・出句料千円 7月20日締切・出句先〒250小田原市鴨宮三七二-2 関水華宛

■雄山閣の川柳年鑑が刊行された。〇〇年と八一一年版の合併号である。定価一八〇〇円。

■川柳研究社55年度賞は、次の作品に決定した。豆の木の花は寝る子の視野におく／保田二郎(石巻) 吊橋を渡る夫を先に立て／荻原鹿声(川崎)

■札幌川柳社では、55年度柳社賞受賞に次の3氏を決定した。

生者必滅花ちりぬるを知らぬ欲／佐藤正。野火のんの乳房はふたつ罪いくつ／京谷京一。主義主張持たず負け大うなるだけ／松本悦子

■噴煙川柳大会 日時・6月7日(日)10時 会場・熊本市民会館 兼題・手記、時の人、ばたばた、レストラン、近所。

■ふあうすと5月号は医博故光武弦太郎追悼の特集号である。氏は、沓岐川柳界の重鎮であり、評論、作品の大活躍をされた方である川柳界は、また一人、惜しい方を失った。

そら涙を流すなおれの極の上に／ユーモアをふりまく時の私は柳／弦太郎

▽同人・柳人消息△

▼本社会員大森登竜氏急逝の報、本田恵二朗氏よりあり。御冥福をお祈りします。

▼西山幸さん(和歌山市)の御母堂、四月中御逝去謹んで御冥福をお祈りします。

▼若本多久志氏(西宮市)は川柳漫談「女・女・女」を香友会だよりに執筆。

▼浜野奇童氏(岡山市)は四月一日付で、津山市佐良山小学校に転動された。

▼国弘半休門氏(下関市)勲六等旭日章叙勲の由、誠におめでたいことである。

▼内芝登志代さん(和歌山市)4月から雅号「としよ」を「登志代」に改名される。

▽句会案内△

■時・花句会 時・6月10日(水)夕6時 場所・西郷会館(八尾神社境内)近鉄大阪線八尾下車

西南歩約3分幸福相互銀行ウラ。

兼題「秘書(西尾榮)いたずら(香川酔々)鍋、泊る大阪風景

連絡先―〒581八尾市中田2丁目302高杉鬼遊

■堺川柳会 時・6月15日(月)夕6時 場所・堺市民会館4F和室 兼題「種・盲点・塩・運転 連絡先―〒593堺市場上緑町2丁9の2河内天笑

■南大阪川柳会 時・6月20日(土)夕6時 場所・松崎町3丁目大萬 兼題「無邪気・むき出し・昔・向う・ムード 連絡先―〒544大阪市生野区生野西1の5の2金井文秋

■東大阪川柳同好会 時・6月27日 場所・東大阪中央公民館2F近鉄永和大駅前 兼題「潤う・飾る・知る・耐える 連絡先―〒577東大阪市新池島町1の4の14斉藤三十四

▽第13回山陰川柳大会△ 主催・東伯川柳会(清水一保会長) 後援・大阪読売新聞社、東伯町、川柳塔社 日時・7月5日(日)AM10時開場 場所・鳥取県東伯町中央公民館 兼題「道連れ、作る、歴史、男、ポケット 各3句 会費・千二百円(発表誌、軽食呈) 懇親会あり。(集録・香川酔々)

高橋操子さんから

金一封

拝受致しました

川柳塔社

職 人

江城修史選

紫の指は染師の夢をもち
 量産に職人氣質放つとかれ
 一本の釘職人の音で打ち
 漆の手染めた職人意地も染め
 職人の目に晴ればれと塔映える
 職人はハッピ着てから顔が出来
 銭金で動かぬ腕を見込まれる
 職人が褒めても器用なだけの芸
 パチンコの職人もいる世とはなり
 職人がさわれば庭石軽うなる
 眺めてる時間が長い植木職
 職人の機嫌よい日の槌の音
 飲む時は飲む職人の腕たしか
 職人の勲章手の皺顔の皺
 職人の手のぬくもりを知るこけし
 背広着て職人氣質まで変り
 職人として逃げ道は探さない
 名匠と云われ終りのない修業
 職人の愛想がよくて不安がり
 手づくりの流行職人忙しい
 親方の握る鋏に無駄がない
 ひたすらに職人で生き掌の堅さ

宵明 凡太郎 本蔭棒 好子 カズエ 博友 甲子郎 佳雲 里風 大柏 木魚 素身郎 どんたく 春草 勝美 一路 満津子 健司 方太 花子 明司

職人の車の色が派手になる
 職人のタバコ段取り考える
 職人に徹し大学出を思い
 職人の気が向くまでを待たされる
 職人の良心ここは譲れない
 職人のあとを我が子が継ぐという

佳

職人の一徹として聞き流す
 千六本まだまだという包丁研ぐ
 ほめられた腕職人に悔いがある
 植木屋の年季の顔で落す枝
 職人と一つになって町工場

人

職人の今日は義理ある三ツ揃
 剃刀を職人だからまかせてる
 職人を継がぬ学資へ汗をかき
 職人の生きる視界にある暮色

天

暴 走

横山一声選

産声がもう人生を暴走し
 ふるさとの山が暴走やめさせる

芳枝 伊津志

暴走も時にはあれと社長訓
 暴走車母校の前をつっぱしり
 老いとても暴走したいときもある
 がむしやらに走って見たい失意の日
 暴走の夫を繋ぐ鎖もつ
 暴走へ進む吾が子に意見せず
 暴走へ聞えぬ愛のさけび声
 暴走族に組みこまれてる家出の子
 暴走の手綱をしめる妻がいる
 青い恋親に叛いて暴走し
 道傍の供花へスピードちよつとさげ
 暴走をする夢を見る車椅子
 暴走と云う名を借りた落ちこぼれ
 云い負けた日の暴走に白い風
 母の掌を翳ぶ暴走は許されぬ
 暴走の軍拡論へ義手怒る
 女の子乗せ暴走はS字型
 青春の暴走母の影を轢き
 算盤をはじけば暴走かも知れぬ
 生活の暴走暗い灯がともり
 深爪を切る暴走の子を思い
 山彦も暴走したのか谷へ落ち
 毎日暴走だとは気付かない
 暴走族悲しく見てるはく捨鳥
 暴走の若者聖書をばいと捨て
 暴走の勇気だけは買ってやる
 暴走をアウトに成ってから気分
 暴走に消える油が泣いている
 或る名士法の穴から暴走し

健司 重人 三五島 規不風 素身郎 佳雲 本蔭棒 大柏 悠泉 弘朗 勝美 文平 四郎 芳子 明司 木魚 ゆう也 凡太郎 宵明 秀峰 七面山 枯梢 テル カズエ 佳雲 裕

暴走の牛へ夕陽が追いかける 大柏

佳

暴走の子にも心に親が住み 大柏

暴走をなだめる友の義手がある 大柏

女史の子に暴走族が一人いる 勝美

暴走の先客が居た交番所 里風

暴走が桜の散り際見ていたり 里風

暴走をすれば私の負けになる 雀踊子

人

ときどきに暴走したくなる化粧 優

地

暴走のできぬ車は造らない 三和

天

就職が決って暴走族を去り 軸

雨

河井庸佑選

雨だれの滴り落ちて岩うがつ 実

遠足をずぶ濡れにする通り雨 花子

やるせなき心に響く雨の歌 弘

雨よ降れ心のなやみ流すなら 悠泉

沈丁花こぼれ冷たき春の雨 勝美

雨の日の好きな詩人のひとり酒 大柏

雨風の中も夫婦の手は握り 木魚

その気なら雨降り込みを祝う膳 秀峰

二人とも傘持たぬまま逢いに行き 哲寿

春雨へ音もたてずに尼の寺 カズエ

雨の日の母が迎える来ぬ不安 茶人

一篇の詩情湧かせて庭に雨 一路

浮足を沈める春の雨静か 満津子

長崎の詩情は雨を絡ませる 松太朗

恋を生み恋をすてさす雨やどり 裕

償いの心へ雨よもっと降れ 道子

雨を得て紫陽花の色また変り 七面山

雨降れと祈る事ある年もあり 綾珠

如才ない男で雨を利用する 伊津志

明日は咲く蓄いじめる憎い雨 喜醉

野仏が沈思黙考雨に濡れ はじめ

降りそうではしい時には降らぬ雨 不二

雨やんでやっぱり星は美しい 喜一

手のひらに降ってきそうな雨男 雀踊子

相傘で詩情豊かな花の雨 芳子

申訳け無さそに照る照る坊主垂れ どんたく

寿の使者 大安の雨に濡れ 重人

棟上げへ降り込む雨は吉とされ 軒太楼

小糠雨恋の舞台にする 柳宵明

頬杖の瞳が濡れる雨の窓 本蔭棒

雨の日も逢いたい女の蛇の目傘 女

散策の古都の雨にもある情緒 保夫

佳

二人来て京都の雨を絵にしている 規不風

傘をさすしなが絵になる古都の雨 優

ことさらに淋しい雨の日のひとり 日枝子

風鈴の 一ト雨呼ぶか音乱れ 春日

土砂降りに出て行く若さ愛がある 美恵

炎え初めた甘い夢消す俄雨 右近

降り出した雨に焦りの罅がある 文平

嫁がせて父がぬれぬ夜半の雨 里風

天

借景の風情をこうも変える雨 軸

軸

「現代川柳百人一句集」

日本川柳界のリーダー百名の自筆によるこの句集は、従来の冊子形式とは異なり一枚一枚が独立した作品として味わえ、装飾色紙としても通用できるのが特色。

■百枚一組、美装函入 ■寸法/19・5cm
×14cm カラー印刷 ■画/小野為郎(無形文化財彫漆三彩工芸家) ■監修/大野風柳、横村華乱 ■定価五千円(但し六月末日迄は三千円)

〈申込先〉北都印刷株式会社

新潟県新潟市大鹿六一三

新潟局私書箱31号

振替口座(新潟) 一一二七二

初歩教室

題 糸 口

本田恵二朗

課題吟の場合に類想句が沢山現れる題と、ほとんど現れない題とがあるものだ。大会などで五百句から六百句の選をする場合には、類想句が二十句から三十句位は必ず現れる。

『その中の叙法が一番よい句を一つだけ頂きました』と披露される選者があるが、私なら類想句は全没にする。類想が多いことは句材が陳腐であることを証拠立てていると私は解釈するからである。換言すると、大会への投句は、類想が絶対に無いと確信出来る句材を発見して作句したものを投句せねば入選せぬものと思わねばならぬということになる。そこに題吟作句の興味がひそんでいるのだと私は思っている。今回の課題吟で類想が沢山現れたのは『糸口をつかんだ刑事の靴がちび』の同類が多数目についていたことを指摘する。

糸口を見つめる努力惜しまない 景子

(糸口を探す図書館通いする)
お互いの我は糸口を見失ない

(我を張り合つて糸口を見失ない)

いらだちの糸口血圧とわかり

もつれ糸根よく口をさがす老い

(もつれ解く糸口探す老いの根)

やつとつかんだ糸口をあたたためる

(やつとつかんだ糸口だあたたためよう)

解決の糸口を風からもらう

(解決の糸口風に貰いうけ)

和解する糸口子供に教えられ

(末っ子に和解の糸口教えられ)

たわいない争い糸口みつめてる

(つまらぬ争い糸口見つめ合い)

糸口がほつれて話がはずみ出す

(糸口がほぐれ話の筋ができ)

お話の糸口見つける口上手

(糸口をほぐす見事な舌三寸)

糸口の見つからぬまま物別れ

仲直りの糸口見付けする仲介

(仲裁のベテラン糸口もう見つけ)

糸口は浪費 横領罪となり

なぞを解く糸口 酔った口に洩れ

縁談を持ち出し糸口見つけ出し

(縁談を持ち出す糸口さぐり合い)

糸口が人生変えて幸を呼び

(ちよつとした糸口人生行路晴れ)

糸口をつなぎつもたす初対面

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

糸口が無く言訳けを引っ込める

(言訳けの糸口探そうあせるまい)

糸口を見つけてもつれた話解け

(糸口を見つけて肩が軽うなり)

思案しても解くきつかけさえもなし

(四苦八苦解くきつかけが見つからず)

ゆずり合うところから糸口見つけ出し

(ゆずり合うそこに糸口見えそめる)

糸口へ二人の力を出しおうて

(糸口をほぐそう力を出し合うて)

糸口がつかめぬままの重い夜

(糸口がつかめぬままの夜が重い)

成功の糸口にじむ玉の汗

(成功の糸口玉の汗光る)

諍の糸口ただせばらちもない

糸口をたぐりたぐりて往く人生

(糸口をたぐり寄せよせ往く人生)

糸口がほぐれすらすら事運ぶ

(糸口がほぐれ順風満帆かな)

捜査の糸口つかめず遂にお宮入り

(糸口がつかめず迷宮の門に立ち)

妾結への糸口見えた夜明け前

糸口をほぐせばいもづる式に解け

挫折する糸口となる白い粉

(白い粉が糸口となり墮ちてゆく)

老境への糸口針が通らない

(老境の糸口針の穴霞む)

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一分間の柳論

稲田豊作

若い頃の一時期、私は神戸YMCAの宗教部主事を務めていました。神との対話を大切にして、日毎欠くことなく神に話しかけ、その指示を仰いでいたものです。その習性は老境の現在も尚続き「神との対話」は私の生活の支柱になっています。

川柳は昭和四十二年の既に六十歳を大分過ぎてから始めました。晩学の決して上手であらう苦なく、柳論など申せる者ではありません。ただ自分の生活信条ですので、私は私なりに「神との対話」から川柳を生み出したい

と思っております。

この対話には、作句するのに一つの利点があるように感じられます。それは人生の善悪、悲喜、美醜が次から次へ、尽きることなく、然もかなり鮮明に脳裏に去来してくるのであります。それは正に路郎先生の「視野無限」であり、「川柳は批判詩」「人間陶冶の詩」に繋がるものと確信が持たれるのであります。生命ある一句を遺せ——いつの日か私もその一句を得て昇天し、路郎先生のお目につかいたものと願っております。

漢方で治す糸口ふと見付け
糸口は受話器取り合う手が触れて
糸口を女の見栄が誇張する
糸口を開き 終りの幕も引き
同窓会が糸口になり結ばれる
糸口は座席ゆすただけのこと
糸口がつかめぬままの春霞
糸口を誘導尋問嗅ぎまわし
糸口をたぐればあつた裏の道
やつと出たゴメンナサイに水温む
難題をかかえる糸口探す日々
愛情の糸口たぐりゴールイン

忠広 同 日枝子 同 やすお 同 義美 同 なみ 同 未知 同

糸口をつかんだらしい中労委
ジレンマへ糸口なかなか見つからず
俵せの糸口教会でほぐれそめ
交際の糸口はスタンドの猪口
改心の糸口つかむ手が光り
幸せをたぐる糸口細さめる
真相をあばく糸口封じ込み
糸口を探せぬ短気が臍をかみ
糸口の推理冷たい雨を聞く
糸口をシヤネル五番にした女
和解への糸口温い師の助言
手短に糸口さぐる示談金

保夫 同 句味地 同 三千代 同 公乃 同 小雅子 同 胡頰子 同

折角の糸口舌禍がもつれさせ
和解する糸口孫の呱呱の声
脱サラの糸口上司と折り合わず
糸口をたどればなんでもない離婚
温情のたばこが糸口 黙秘解き
お茶でもが糸口とさり梯子酒
同窓会が糸口不倫の恋進む
糸口がもつれもつれて愛不信
糸口をたぐれば根葉もない噂
(糸口をたぐればたただの風使り)
無駄口は叩くが糸口見つからず
糸口が見つかるまでの一と苦勞
糸口が欲しくて金の草履はく
糸口に女が結んでいた絵解き
糸口に忍耐の二字貼っておく
糸口を結び二人の愛を織る
糸口を掴めばメッキが剥げかかり
糸口で声なき声が音をたて
乾きすぎ和解の糸口つかめない
Uターン糸口つけた村祭り
妻の掌にもつれ糸口握られる
糸口を見付けタバコを捨てて立ち
糸口がつかめず昼寝でもするか
糸口がなくてあの娘とすれ違ふ
糸口を探してもしない冷戦中

同 三男 同 柳五郎 同 美乙女 同 八文銭 同 武水 同 寿子 同 英子 同 健司 同

題 煙草 6月20日締切(8月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四
本田恵二朗

大 萬 川 柳

「節 約」

入 選 発 表

選 者 川 村 好 郎
 投句総数 三百八十六句
 入 選 四 十 四 句

枚方 弘

節約を無言で教える母である

交野 テルミ

節約をさせてなるかとコマージュル

大 阪 ふ み

年金の暮しに節約慣らされる

京 都 桐 下

化粧品だけは節約せぬ母娘

倉 敷 方 大

お役所の節約かけ声だけ立派

寝屋川 晴 風

折角の節約ローンに追い付けず

米 子 雄 々

節約を笑った人が借りにくる

尼 崎 利 美

子に節約説くには物がありすぎて

大 阪 利 義

慶弔金だけは節約出来ぬ義理

橋 本 木 魚

節約に女の虚栄邪魔をする

熊 本 芳 仙

節約へ目かくしをして華燭の灯

貝 塚 千 代

節約は立前ケチは本音なり

大 阪 兼 治 郎

家計簿をたてに節約迫る妻

富田林 花 梢

節約の母に遠い日のいくさ

松 原 重 人

節約を言うて衝動買いをする

東 子 悠 泉

節約の分遊学の子が使い

宝 塚 静 馬

節約を愛で補う子沢山

節約も限度二人の設計図

節約で送る学資と子は知らず

別宅では節約のセの字も仰っしゃらず

省エネを説くメーカーの売らんかな

節約の膳へ愛情のかくし味

節約の心がゆらぐニューモード

因習へ節約容れぬ周りの眼

節約は妻がしてるさバード飲み

地ノ句

夫の汗知って家計の糸を締め

米 子 日 枝 子

米 子 み どり

米 子 悠 泉

米 子 雄 々

米 子 利 美

米 子 木 魚

米 子 芳 仙

米 子 千 代

鳴 戸 芳 水

高 知 三 吉

寝 屋 川 あ い き

大 阪 好 一

和 歌 山 英 子

兵 庫 左 春

豊 橋 貴 弘

東 大 阪 美 子

和 歌 山 壽 子

大 阪 君 子

八 尾 夕 花

和 歌 山 三 男

和 歌 山 正 博

美 面 一 本 杉

岸 田 千 舟

大 阪 道 子

和 歌 山 三 男

和 歌 山 正 博

大 阪 道 子

大 阪 兼 治 郎

大 阪 兼 治 郎

大 阪 兼 治 郎

大 阪 兼 治 郎

大 阪 兼 治 郎

大 阪 兼 治 郎

大 阪 兼 治 郎

天ノ句

米子千代

節約の母の手綱にあるリズム

選者吟

包丁が節約一番先に知り

昭和五十六年度

ベストテン(四月現在)

一	花梢	一〇・〇	富田林	九	美幸	五・〇	八尾	第八回
二	君子	八・五	大阪	一〇	どんたく	五・〇	神戸	「特別」三句以内
三	寿子	七・〇	和歌山	一一	智子	五・〇	大阪	締切 七月二十日
四	一三三	七・〇	堺	一二	凡太郎	五・〇	岡山	
五	好一	六・〇	大阪					以下略 投句先
六	道子	五・五	大阪					〒593 堺市堀上緑町一―三二七
七	雄々	五・〇	米子					藤井一三三方
八	千代	五・〇	米子					大萬川柳会

川柳塔社常任理事会(五月二日)

〈出席者〉生々庵・栗・多久志・好郎・形水
 ・小松園・水客・紫香・潮花・萬的・太茂津
 ・薫風・鬼遊・与呂志・岳人・瓢太・吸江・史好。

〈議事並びに報告事項〉

☆多久志氏より四月分本社会計報告あり。

☆先般の同人費値上げにつき同人有志より異議の申し入れあり、多久志氏より事情説明、了承を得た。

☆柳塔賞、川柳塔賞の中間候補作品は十句に限定せず、十五句以内で選んで貰うこととする。

☆多久志氏より来る七月路郎忌句会にお供養

として句帖三百部寄贈したいと申し出あり、
 ありがたく了承。

(記録・史好)

一分間の柳論

荻野 鮫 虎 狼

川柳塔社の同人となり諸先輩の秀吟を色々
 と拝見し大変感謝しています。私も地方では
 拙吟を楽しんでおりますが、川柳とは常に自
 分の感情の分身であると思います。嬉しい時
 には嬉しい句が、悲しい時には悲しい句が抵
 抗なく作句出来る事、これが川柳の真髄であ
 り、これらの句が自分の生活の中の一頁とし
 て残ってゆく楽しみが、何よりも嬉しい事で
 す。

俗に苦吟と称して出来る作品も面白いもの
 ですが、自分の生活には密着せず他の川柳作
 家を混乱させ、また一般川柳愛好家に川柳と
 はこんなものか、と批判されるのとも思いま
 す。

常に自分の生活のうたであり、誇張したり
 美辞麗句の羅列である事のないよう心掛ける
 と同時に「川柳塔」の川柳として恥かしくな
 い川柳が作りたいものです。

■6月の常任理事会は4日(木)

本社 五月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

前夜からの熟発を押し、柳話の責任はど
うしても果したいと出席の小松園氏。二階
の窓辺に並べた鉢植の花が、どんなに向きを
変えても太陽の方へ曲る。測ってみると動く
巾は一日に三寸にもなる。小さな花でも、こ
んなに生きることに懸命だ」と。予定より早
く切上げられたが感銘深い話であった。

月間賞は板尾匠氏が獲得。(史・好)

(受付)与呂志・敏(重人)

(進行)柳宏子、記録(雅遊)
出席・重人・与呂志・憲祐・弥山人・雅風・
勝美・太茂津・萬的・滋雀・水客・寿美子・
紫香・英子・武太・右近・九平・健司・綾珠・
千代三・美乙女・喜一郎・トメ子・糸葉・千
万子・山久・智子・薫風・史好・眉水・栞・
翠光・潮花・作二郎・涼一・千寿子・桐下・
射月芳・三十四・柳宏子・規不風・頂留子・
文秋・君子・善紫・吸江・鬼遊・蘭・好郎・
寿子・一二三・弥生・酔々・喜風・洋敏・鎮

彦・信治・川狂子・岳人・悦郎・雀踊子・柳
伸・度・凡九郎・禎三・小松園・葉子。

席題「見学」

墨作二郎選

社会見学けつたいな看板見て歩く
見学のコースへ花の山も入れ
史蹟見学雨の用意もして出掛け
見学で背の高いのが羨やまれ
持ち時間がある見学のひとこまで
隙間から見学しているとりの子
お土産を呉れる見学ばかりいく
見学の男はカレライス好き
見学の一人核心について来る
見学をする味噌樽は洗われる
何を見学したのか議員のバスポート
見学もまばら鶴匠も気が抜ける
見学の旗にぞろぞろついて行く
見学の人が途絶えて春の雨
屋上へ出て見学の背を伸ばし
見学はパンタの昼寝だけ覚え
見学へ安全帽が落ちつかず
見学の列が仔犬に乱される
酒蔵の見学下戸が酔っている
動いているものに見学みなとまり
見学の出口でくれる温いもの
見学が通るとこだけ掃除する
見学を済ますと海が見たくなる
午前中だけの見学うけている
見学の席には居ない鴉の子

席題「届く」

垂井千寿子選

アルサロから届く封書に紅の跡
落し物届いて日本ワングフル
税務署の通知はキツチり届きます
嫁はんの変更届受理されず
手の届くところから消える孫の菓子
旅便り届く頃には戻つたり
買うと云わんのに見てくれと荷が届き
回覧板届け下駄箱はめて去ぬ
飲み仲間荷物のように届けられ
拾いもの届けついで調書までとられ
忘れもの届けついで長つ尻
ネクタイが届いて父の日知る別居
養育費届けて罪を軽くする
一抹の愛を残して離婚出す
デパートの届先追う女の眼
幸福な届けへ受付無愛想
大安に見栄積み上げた荷が届く
出生の届け大きな夢も添え
届けたなし声革新も保守もない
作意などなし母からの荷が届く
俺の声天まで届く時をまつ
惜みなく愛を届ける車椅子
手の届く場所に毒花咲いて見せ
ふる里の味覚届いて母達者
花屋から届けて呉れる詩こころ
届いても届かなくても母の文
親不幸に届かぬ父の時計なる

萬的
柳伸
眉水
武太
翠光
柳宏子
文秋
悦郎
吸江
柳宏子
蘭
千万子
桐下
悦郎
千万子
英子
英子
千万子
寿子
信司
健治
悦郎
右近
勝美
桐下
君子
雀踊子

親の手の届かぬところで子の育ち
 原発の炉心に世論届かない
 心だけ届けばそれで満ち足りる
 勲章へ軍手の汗が届かない
 天にまで届く気風船あわてない
 いつの日か届く情を抱く女
 花言葉届くきれいな刺がある
 絶頂へほんのいのちの名で苦言
 手の届く花のいのちは短かすぎ
 家計簿の赤に届かぬ夢がある
 手を伸ばすから届かない事を知る
 二百渾海の魚には届かない

兼題「快活」 板尾 岳人選

快活がいるので泣きごとなど云えぬ
 快活な河童になれる酒がある
 火葬場で快活な子が叱られる
 快活な男でいつも斬られ役
 快活な子供歯菌が欠けている
 又泣かして来たらしい詫びに行き
 空手二段快活なかくや姫
 快活へ笑い袋をさげている
 一合で快活二合で泣き上戸
 人気者ちよっぴり太目で快活で
 快活を忘れて長男生れて来
 快活な人も税務署ではしよげる
 快活な音で近づく男下駄
 快活な仔犬は愛を独りじめ
 熟年という快活を見なおされ

柳宏子 史好 凡九郎 重人 雀踊子 一三三 太茂津 信治 滋 桐下 凡九郎 千寿子 弥生 鬼遊 千代三 潮花 千代三 与呂志 女 雀踊子 一三三 弘生 静馬 蘭 糸葉 糸葉 栗

つり橋を渡り快活さに出逢う
 快活な男過去には蓋をする
 快活な嫁来て家の戸軽くなり
 快活に乾杯をする米寿
 快活な男が見せる影法師
 快活が部屋のお空気を軽くする
 快活なトレバ舞妓はんには見えぬ
 快活な健忘症で一番星
 葬式の日も快活な葬儀屋で
 快活に首塚揺れる透明度
 快活に笑う女でよく食べる
 快活なドラムに拗ねるのもヒエロ
 天井機敷から快活な矢がこぼれても
 快活な妻で裏切るはずがない
 せめて五月は快活な馬鹿になる
 快活なうなろうと薬飲む
 快活な鸚鵡に騙されてはならぬ
 小便僧の快活さに負ける
 葬儀屋のバイトに向かぬ快活さ
 サークスの馬の蹄は快活か
 道化師の靴を快活だと思つ
 文鳥が死ぬまで快活だったのに
 快活に質屋ののれんをくぐり抜け
 快活に笑いで男の手を払い
 快活に笑う少女は真白で
 快活な詐欺師がパンの耳を買う

兼題「輪」 野村 太茂津選

柳伸 健司 右近 栗 健司 雀踊子 静馬 規不風 史好 醉々 雀踊子 柳宏子 作二郎 凉一 醉々 君子 太茂津 智子 寿美子 作二郎 作一郎 史好 智子 滋雀 射月芳 岳人 花村

スランプの焦りタバコが輪にならぬ
 両輪がほどよくきしむよい夫婦
 動いてる輪の一つで抜けられぬ
 早耳のまたレモンに男運
 輪切りするレモンに薄き輪
 輪になるどんだん声小さくなる
 波紋の輪見たたくて男石投げ
 紫煙の輪飛ばして企み追っている
 指で輪をつくりお袋拜まれる
 五月晴れボチに首輪が痛くなる
 老犬に重たくなって来た首輪
 知恵の輪がとけぬ夫婦の間風
 円い輪のなかから人は出られない
 ウソの輪をつなげば母のところで切れ
 つなごうよ地球の丸さと輪を描く手
 はみ出せばそれだけ父は輪を抜け
 輪から出たおとこ切札錆びてくる
 限られた輪一パイの老いの趣味
 輪をかけた話は鼻で聞いている
 いつかしら輪が出来夕陽美しい
 鯉のぼり子の輪に入る春の風
 蝶飛んで来てなわとびの輪を抜ける
 コンパスの輪からはずれた土地を買い
 知恵の輪が解けると夕陽が沈むなり
 魂を売って首輪を嵌められる
 地下足袋の女もまじり反旗の輪
 離婚せぬ約束で解く知恵の輪
 人の輪が崩れてともる狐の灯
 愛一途おんな心の輪を預け

史好 弘生 静馬 雀踊子 柳伸 萬的 勝美 君子 紫香 水客 千寿子 凡九郎 規不風 翠光 紫香 弥山人 作二郎 潮花 岳人 射月芳 好郎 弥生 醉々 一三三



■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川酔々)

川柳ねやがわ

高田 博泉報

曇りのち晴れを信じることにする
天気晴朗なれど雪害後遺症
嫌われてそこに自由があるらしい
天気図に妻の気圧は書いてない
噂りに新聞少年はげまされ
税務署をこわがる経営者にもなれず
あなたに会って世界が広くなってきた
さあ翔べ鳴けお前の空だ揚雲雀
あたり翔べの事だと税金そっけない
税を喰う虫手造りのかくれみの
連休の一日妻の舟に乗る
また若い鏡へ自問自答する
つまずいた日から自分をみつめ出し
恐山不思議な風が吹いている
叱ってる子供に自分見つけ出し
汚れない中は湧えてたテレパシー
紅梅も白梅もある無名寺
自分には見えぬ背中に齡がある
抜けるよよ空へリユニックの鈴が鳴り

静 満津子 山久 英王 弘生 光夫 右近 あいき 一念 晴風 野茶 洋成 重成 博泉 シマリ てまり 亜純 鶴声 鬼遊

天真な子の絵はいつも晴れている
好調の波に自分を見失う
自分だけ野次馬でない話し振り
ドレミファのリズムでつくりし伸びてくる
納税をすませ階段駆け下りる
自分でも嫌な自分が同居する
ピエロもつ自分をだますことに馴れ
天気晴朗なれども妻は荒れ模様
本棚を碧のように老作家

太陽のなごころへ山はさからわぬ
山里のなさけ言葉も柔らかい
出直しの前に大きな山がある
山ひとつ越えて郵便やってくる
劇的な幕切れ女神笑いかけ
揚幕のかけで疲れる初舞台
山男やさしい妻と子に詫びる
山男天気予報にしがみつきの
ここからは女人禁制山となる
応接多忙すく灰皿が山となる
山男山の匂いを持ち歩き
万歳を三回言ううと幕になる
花吹雪私は今日の幕おろす
新人へもう両派から誘いの手
片腕は国に捧げた袖がたれ
花の名は知らないままに四季うつる
新人の本はこわさぬ思いやり
頂上を本籍地にしたい山男
山道に迷うと炭焼小屋がある
あの山を越えると他国者という
太陽が西に沈むと自然だな

堺川柳会

河内

天笑報

三千子 柳宏子 小路 小松園 一途 恭太 翠光 薰風 凡九郎 美乙女 紀美女 笑痴 一一三 柳宏子 与呂志 儀水 善紫 軒太楼 東雲 健司 千万子 天笑 弘子 鶴丸 小松園 千代三 岳人

生きてゆく掟自然は妥協せず
はつきりと言えない山にある慕情
南大阪・双葉合同句会 中川 滋雀報

からっぽの灯油缶にある余寒
見せられぬ男の背にまだ余寒
花冷えと云ってはおれぬ受験生
旅飽余寒も計算して詰める
母の手がまた荒れている余寒
いつまでも寒いとこぼす踊り子よ
梅一輪母の許しを待つ余寒
一蓮託生肚をくくってよく眠り
一枚の切符でとことんまで二人
雪女の恋は一緒に死ぬのと云う
野いちごを一緒に摘んだだけの仲
一緒なら云える言葉をためている
ものの芽が芽ぶいていっしょになる噂
吊橋をいっしょに渡る人を撰る
カナリやもいっしょに歌を忘れてる
早よいかや三日見ると花だより
三月の作業衣少し軽くなる
美しく嫉妬している三面鏡
産み分けが出来たら夢が消えるだろ
一枚の絵にして男女灯を点す
男と女の間でコーヒーさめている
男嫌いな女嫌いが好きになり
すがりたい男がほしい女坂
まてい男する女の貯金箱
慌てる男を見てるのは女
男と女のみにくさがあるゼニの音
男と女が流れてゆくように
隠しても母は苦勞をすぐ見抜き

悦郎 静子 新之助 いくの あいき 智慧子 藻介 岳人 柳宏子 眉水 萬的 小松園 花梢 千花 醉々 頂留子 鎮彦 文秋 君子 千里 柳志 柳とし 美代 雅風 雀踊子 智子 久子

自叙伝へ苦勞話を飾り立て

種まいてからの苦勞を土は知る

苦勞する子へ振つてゐる母の鈴

母親に苦勞の影がつきまとい

気苦勞を見せぬ女房は五つ上

砂山の苦勞を波が消して行く

商人の苦勞がしみる五つ玉

苦勞した程にはつかぬ男運

人生の余寒の中に居る定年

昭和の子三歩進んで師をなぐる

人生を愛える日もある三文判

人生の縮図三面記事にあり

三面記事血圧あげる事ばかり

三人目の男はやはり叛逆者

三面鏡嫁ぐ日の微笑を映して

川柳化粧槽

仲抱いて女優越感に酔う

健康な孫が自慢で連れ歩き

平凡に暮し政治は口にせず

マネキンの女造花の顔で待ち

ローカル線レールは草に遠慮して

楓

滋

茂

節

小

洋

鬼

憲

弘

恒

妙

田

千

凡

公

紅

秋

岳

葉

奮

實

人生の終着テープは張つてない

結局は光つた頭の知恵を借り

何の因果も光がこわいといふもぐら

年頃へ母が監視の目が光る

四苦八苦しなから楽しんで解くクイズ

どの角度見ても富士山美しい

雀エネにふとボタ山は目を覚まし

ふるりの山は楽しい夢があり

山男それから先は無い記憶

甘く見た山に命の軽さ登る

故郷に似た山だから登りたい

山奥に住み込む孤高の人となり

山越えてまた山のある国境

大学を出て山の彼方へUターン

山頂で吸えば空気に味が有り

峰歩く男の背が寂しすぎ

父の絵の山へ登って行く母で

キャンパスに青一色の山を画き

山近う見えて一雨さそうなり

いずも川柳会

世の中の辛さにもろいのが自殺

射月芳

加仙

こ

民治郎

せつ子

さよ子

浪速子

加代子

辰雄

春榮

富志子

善吉

世界人

武助

幸代

岳人

白光子

操子

草子

夢一醉

久家代仕男氏から

川柳塔の発展費として

金一封

いただきました。

川柳塔社

子にかけの母満願のない祈り

蝶誘う温室の花もだえ咲く

明日帰る母を誘って演舞場

過去を消すゴムがないか思い出す

マージャンの誘いに小言背に出かけ

月明り誘わぬ影がついて来る

またしても願望空し女の子

行革の願ひ横から赤い風

京都塔の会

退団を女のお好きな彩がない

原色に女の好きな彩がない

さりげない味に苦心がひそんで

編棒と話してころを編みあげる

初釜のひとり振袖の蝶が舞う

眼の奥に自負あり女先手とる

妹が生まれれたつく小さい姉

九二老

芳枝

湖美也

正朗

裕

独仙

緑之助

杜的報

松川

花代子

潮花

芳子

美穂

孝江

水客

明代

紫香

杜的

白漢子

俊三

飛鳥

愛のムチ認めて嬉し被告人

省エネへ太陽の知恵借りてくる

低気圧彼岸詣りをダウンスさせ

職人の氣質にそまぬ規格品

這い這いを真中にして初節句

がり勉が是か非か窓の雪歌う

屋根に猫此処にも春は待つていた

中曾根も河本もなしどうなる世

駒つなぎ川柳会

春を待つ美代ちやんの赤い靴

庄屋の屋根も小作の屋根も包む雪

石の向き変えてわたしの庭にする

玉椿凜と彩どる冬の庭

おしゃべりが湯冷めしてきた貰い風呂

湯冷めせぬうちに辞する貰い風呂

湯冷めするとうな優しい顔でない

湯冷めする都会の風呂は長くなり

湯冷めしたクシャミで止んだ立話

女湯をのぞきすぎると湯冷めする

集金に湯冷めするとは云うとれず

うろろろしすぎて湯冷めを叱られる

町会の用事が湯冷めして帰り

友達の話は長く湯冷めする

湯冷めせぬ垢が浮いにくすり風呂

湯冷めしてくるのにかからぬ電話

湯冷めしても女無心に爪を染め

金策の宿で湯冷めのあほらしさ

冷戦中の夫婦が少し湯冷めする

肩抱き合って一人に湯冷めなどは無い

大吉のみくじをひいた牡丹雪

川柳化粧槽

植村客遊子報

三日造

久仁於

義美

谷口

素石

掬治

虹汀

回天子

小路報

糸葉

恭太

美幸

美代

射月芳

善信

千代三

柳柚

柳宏子

鬼遊

健治

善柴

小路

恒明

憲祐

美乙女

桐下

宏子

雀誦子

小松園

醉々

長男の職も決った初春の酒

寒椿つばみをみん孫がもぎ

盲点を知らせてくれた事故現場

死中活求め闘病日誌かく

雑種でも元氣取り得の犬を飼う

写真とはほど遠かったマイホーム

逃げ足の速さを褒めて笑われる

老いの身の安泰願う寺社詣で

人の世はおみくじにない凶がある

お茶お花自動車免許まで狙い

唄からは苦手で下手な踊り見せ

噂からは七十五日逃げている

大根を背負って母がやって来る

盲判案外スツと押して呉れ

川柳ささやま

お一人の気まぐれ皆を振り回し

気まぐれがボンとはずんだ寄附の額

鏡台の偶気まぐれな妻の語気

徹夜までして作ったのがこれかいな

何かしら村に徹夜の灯がひとつ

ラーメンも息子もびびっている徹夜

晩酌に男の夢が錆びている

夢だけで終わった父の骨拾う

孤々の声ママに大きな夢が出来

よく似合う着物の柄に腰が伸び

軍服が似合った頃の影もなく

作業者の似合う女で満ちる日々

紐がすり似合うがままに逝った母

カニすきの句座暖かい柳友の笑み

海女を打つ水雨へ投盃遠慮する

川柳たけはら

森井 善居報

紅月

秋月

岳詩

香雪

奮水

實男

越山

永楽

大鷹

秋峯

きよ多

三青

拍秋

客遊子

貞子

みのる

文平

越山

近郊

ひか平

可住

百合子

千代子

一盃

与志

靖子

美智子

和子

宗珠

沈む日に地球の動きしかと見る

改憲の論者へすすり哭く碑文

自転車軽さよ今日は給料日

春泥のうわさカルゲンが目覚ます

少年のホールへ夢が詰めてある

春風にへアカットをせかされる

戦いに勝った菜の花春を咲く

すがすがし朝日降りこむ新家庭

雪に老若男女思惟

浅間しいこころの糧のお念仏

八十五大往生と他人は言う

ふろしきの結びめ女ふと匂い

色も香も現役でいる梅古木

絵馬褪せて平和に慣れた子が育ち

春を溶く絵皿の中にわらべ唄

権力という妖怪に耳がない

必要な嘘かも知れぬ糖衣錠

手のとどく伴せちよと小さすぎ

お荷物になるつもりだ息子らよ

どん底で春の足音しかと聞く

ふと柳大妻の匂いの未練かな

川柳歌

西岡

三度目のハイクで見つけた道祖神

欲の皮生きる望みへ力付け

春一番草木も虫も飛び起る

背伸びして吸う空気にも春の味

春一番母の温さをのせてくる

義理一つ春一番の坂登る

ふとこも底冷えのする申告書

寄席帰りまだその顔が笑ってる

絶対という自惚れに出た誤算

シゲヨ

静水

笑子

紫光

節夫

中三愛

小六紀

靖子

不朽

房子

蘭幸

比呂子

鈍舟

善居

鬼焼

西合

一路

かつ子

秀水

里香

かつこ

洛醉報

德松

秀峰

敏

ひろ子

洛醉

与志

君枝

天平

本蔭棒

絶対の重みをはかりにかけてみる
絶対の負けを知つての横座り
平凡な幸せと共白髪
平凡な暮らし支えたる愛があり
平凡な男が背伸びしたくなり
平凡な今日日記に書くことがない
平凡な妻で風雪耐えて呉れ
黒板のチョークと老けた凡教師
平凡な人で気安う話せます
平凡な朝トーストの焼ける音

東大阪川柳同好会

齊藤三十四報

順苑の鈴をためさず渡り鳥
神苑の鳩は花嫁の先頭す
籠の鳥世間知らずの娘に育ち
鳥肌が立つ程怪談室に入り
雁の鳴く古城佗しく丘に立ち
籠の鳥四季を忘れて鳴いている
無精卵と知らずめんどり抱きつづけ
野笛に残る歴史を噛みしめる
野鳥来て庭の赤い実食べつづく
雷鳥は生きる知恵持ち雪山に
傷ついた野鳥へ子等の善意の手
鷹になる為に少年塾へ行く
京稲荷焼鳥雀と信じとこ
ライバルの個展やっぱり見に出かけ
個展と云う名で生きさまを見てもらう
髭をそり落して風邪を引いている
変なところ言えば殴られそうな髭
その役になりきる台本抱いて寝る
人生はうたかた台本などいらぬ

うみなり川柳会

小林由多香報

酔花 胡蝶 二天坊 雅渠 笑風 道子 清風 六龍子 淳水 喜風 弥山人 三十四 喜風 白屯 良京 勝美 孤舟 悦郎 綾珠 千代子 柳宏子 湖風 雅風 美子 雀踊子 鎮彦 恒明 善紫 滋啓

坂登りつめて一望千里の丘に立つ
好天が登りの足にはずみつけ
ローギヤー入れば五十路の坂登る
軽うに登つて視野が狭すぎる
カラフルな屋根でかけろう燃えて
商才が屋根の色にも気を配り
城下町もうここだけの屋根の紋
大臣が出た屋根を見て大志抱く
柿ひとつ屋根を叩いて夜深い
寒波にも季節たがえず路のとう
わがまが結婚シーズンまた逃がし
売れ残りシーズンオフとしてもうけ
行楽のシーズンをよぶ好天気
色変えて山シーズンの貌つくる
余剰米あつても豊かな稔り待ち
豊かさに馴れ値上げにも馴らされる
野菜買う百姓豊かなくらしをし
ライバルを追い抜く道が狭く見え
遠回り無駄ではなかつた道で着き
自信ある道直線に見えてくる

富美湖 舟宏 静夫 葉士人 希満子 単車 天人 大漁 盛桜 吟月 吟月 華子 由多香 一町 芳泉 無人 美智子 とし江 熊生 深水報 まさ子 利凡 武雄 明男 眞琴 十郎 溪水 富子 としよ

川柳しんぐう 川上 深生 声かけてくれた英語へ啞になる
幾山河越えて夫婦の和が固い
食欲が増し看護が拝まれる
祝電の数で幸福計れない
山いくつ越えたか平和な喜寿迎え
山へ来て思い出つた都会の子
山登る働く汗と遊ぶ汗
植林へ山生き返る彩になり
子の育ち嬉しい増築設計図
裏印へやっぱり肉親増す絆

増税を阻む若の労働歌
増産をコンピュータに急かさされる
英語を知らぬ話せぬ父が好き
アメリカのアホでも喋っている英語
英語など知らずに過疎の土に生き
英文科出て英語がしゃべれない
十字架を背負う祝電かも知れぬ
祝電の披露長くて酒がさめ
出席の裏で泣いてる片想い
祝電の裏で泣いてる片想い
川柳わかやま 堀端 三男報
別れてもこのぬくもりは借りておく
旅の風心の傷に触れず吹く
浮き沈み素直に髪が添うてくる
二度これぬとこで落書したくなり
木枯しへ老婆の耳に軍歌住む
くいぶちの中でほんのり酔うている
一つしか持たない顔の善人で
石垣に爪たつる思いで初心
抵抗を胸にたたんでいる妥協
聞き耳がささやきはかり追いたがり
歩き初め大地が揺らぐほどに踏み
北浜の戦さは手を振るだけで足り
面影を辿ると弥陀の眉あたり

佳句地10選 (前月号から)

中川 滋雀選

武太 千寿子 雀踊子 大輪 弘生 英子 淑也 笑三 はしむ 淳子 光代 善太

本社六月句会

日時 六月八日(月) 午後六時
会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下東東スグ
電話 271・3935番

兼題
おはなし

「太い」
「体臭」
「来客」
「楽園」

阿萬萬的
津守柳伸選
神谷凡九郎選
若柳潮花選
大坂形水選

席題 二題 当日発表
会費 三百円

各題三句以内厳守

★投句は句箋に一葉一句、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

7月の兼題 「眠る」 「惚れる」
「石」 「正義」

本社7月句会は7日(火)6時から

暑中広告受付!

★一口五百円(タテ3・3cmヨコ2・5cm大)。

本誌五段組の一段(柳界展望の一段)分が二千五百円です。ご協力のほどお願い申し上げます。

★原稿切は6月25日必着のこと。

募集

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選
水煙抄(10句)正本水 客選
愛染帖(3句)橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)
「孫」 石垣花子選
「ローン」 藤井一二三選
「情熱」 山内静水選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選
水煙抄(10句)正本水 客選
愛染帖(3句)橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)
「始発」 植山武助選
「花束」 大森孝華選
「鮎」 増田竹馬選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

6月の常任理事会は4日5時から

定価 五百円(送料45円)

半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十六年五月二十五日印刷
昭和五十六年六月一日発行

編集兼 中島蓬太郎
発行人 藤原童心社
印刷所 藤原童心社

〒542 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社

電話(06)271-3935
振替口座 大阪・三三三六八番
三和銀行心斎橋支店
普通預金口座番号・一〇二七八三

編集後記

★川村好郎先生のあとをうけついでNHKのラジオ番組「老後をたのしく」の川柳選評を担当することになった。四月十一日引継ぎの挨拶が放送されたのだったが、選者の近詠として、「水平線今にどんでん返しある」を披露し、静かな水平線を見ていても、何時

肉体疲労時のVB₁₂補給に

アリナミンA

アリナミンA25の効能 肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚氣、☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



地震や戦争が起るやも知れぬし、水爆実験や原子力発電の目に見えぬ被害を受けているかも分らぬ。現代の不安を表現したかったのです、と述べたところ、お昼のニュースで、米原潜の日章丸当て逃げ事件が報じられ、タイムングの良さに驚ろかされた。初代の中島生

々庵主幹から三代目、「売り家と唐様で書く三代目」の古川柳の通りにならぬよう懸命に頑張ります。ご支

★御手討の夫婦なりしを更衣／藤村

六月一日になると、おおかたの中・高校の生徒は、一斉に冬の黒服から夏へ服装を更える。学生だけでなく、陸上、海上、航空幕僚の監部の隊員、海上保安庁の役人もそうである。

ガクランワというのか上衣の長い学生服にお別れる学生も可成りいるようである。さっぱりした方が見た目にも暑くるしくなくて

コロモガエは、陰曆四月

一日と十月一日に行ない、几帳や畳など調度も替えた古語辞典にある。源氏物語、桐壺に「いづれのおほんときにか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに」とある「更衣」は女御に次ぐ地位である。

天皇の衣をかえることをつかさどり、また御寝にも侍した女官の呼び名である衣がえを、更衣えと更くのもこれが起原のようである。川柳もまた更衣の時季

★「早大不正入試」「破産

ゴルフ場をめぐる司法の汚職及び証拠隠滅」「敦賀原発の汚染廃液大量流出」や「米ボラリス型原潜ジョーシ・ワシントンの貨物船当

直接関係がないからと実生活

うならば、もっと権力や不

お買物は 4都を結ぶ 大丸へ!



大阪・東京
大丸
京都・神戸

正に血をたぎらせ怒るのが当然なのではなからうか。最近の川柳作品の多くは、社会と隔絶した私的 inward 性が主流のように感じられて

★5月号の本社旬会の記事の中で「常勝橋」と書いたところが、あれは「浄正橋」が正しいのではないかとご指摘を頂いた。★たしかにそのとおりで、常日頃、人名、地名には注

★地図で確認すれば何でも

(史)

昭和四十二年一月九日 第 種郵便物認可
昭和五十六年五月二十五日 印刷
昭和五十六年六月一日発行 毎月一日発行



タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 IGC-162型 280,000円
平面表示ゼロサブレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社

つめたさに、おいしさをそえて……………

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドージマ店

近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)

サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)

京阪モール 新川売店 虹のまち鹿鳴

南海難波駅構内店



大阪・なんば



TEL (641) 0551